■まえがき　新説：空海の「空白の七年」と「虚しく往いて実ちて帰る」

空海研究者や空海の伝記・事蹟に関心をもつ大師末徒にとり、いわゆる「空白の七年」、すなわち『三教指帰』を書いた二十四才から入唐留学する三十一才までの間、若き日の宗祖大師（以後、空海）は、どこで何をやっていたのか、これは「虚しく往いて実ちて帰る」の意味を読み解く上でもカギになる問題ながら、今以て不明のベールに包まれている。要は、確たる資料がないからである。加えて、空海は自分の来し方について多くを語らず、むしろ秘してさえいるからである。

時に、平成十五年（二〇〇三）、空海入唐一二〇〇年の前後、研究者や識者の間で空海入唐の目的や動機についていくつかの見解が出された。曰く「伝法灌頂の受法のため」、曰く「『金剛頂経』系の経軌請来のため」、曰く「『大日経』具縁品以下受学のため」、曰く「密教儀軌受法のため」等々。私も「『大日経』具縁品以下の真言や儀軌（作壇法・供養法など）理解のためと、サンスクリットを本格的に修得するため」と論じた。

しかし、今回「御請来目録」を読んでみて、いかに空海が「空白の七年」に相当なレベルで仏教も密教も梵字・悉曇・真言・陀羅尼、すなわちサンスクリットも、修得していたかがうかがえ、空海は大安寺三論の沙弥どころか、今で言えば第一級の仏教学者に劣らない仏教理解のもとに長安に行ったことが想定され、話はそう単純・簡単ではなさそうである。すなわち、右の議論はいずれも正鵠を射たものではなく、もっと多元的で複合的ではないかと思う。

私は拙著『空海ノート』を書いた時からずっとこの「空白の七年」と入唐留学の目的・動機の関係に関心をもち、

①『三教指帰』の頃の空海の仏教理解のレベルについて、

②その後の「空白の七年」における空海の仏教理解のレベルについて、

③同時機の梵字・悉曇、真言・陀羅尼・梵讃、すなわちサンスクリット語学のレベルと修学について、

④「虚しく往いて実ちて帰る」の真意について、

⑤引いては、入唐留学の目的・動機について、

長いこと思案してきたが、今回「御請来目録」の読み解きから、新しい視点を持つに至った。

それは、すでに稲谷祐宣師も言っていることだが（「奈良時代の密教経典と空海」『密教文化』七十三号）、空海の「空白の七年」に確たる資料がないとすれば、次善の方法として、空海が請来した仏典から、空海の仏教理解のレベルや密教に関する素養のレベルやサンスクリット語学のレベルや、「虚しく往いて実ちて帰る」の意味を推量するということである。

然らば、①『三教指帰』の頃の空海の仏教理解のレベルがどんなものだったか、である。

先ず、和泉の槇尾山寺で得度し大安寺所属の沙弥・如空になって四年、仏道に入る宣言の書『三教指帰』を書いた頃、空海が身を置いた南都仏教の趨勢はどうだったかを言えば、空海の拠点である大安寺の三論が衰退し元興寺・興福寺系の法相が勢いを増していた。空海の法系を辿れば、大安寺の入唐僧で三論の学僧でありながら虚空蔵求聞持法を伝えた道慈、道慈の弟子で三論・華厳のほか求聞持法など雑密も修めた慶俊、その弟子で入唐僧の戒明、道慈の弟子で入唐して三論を究めた善議、善議の弟子で空海の得度の師勤操が挙げられ、法相系を見れば、飛鳥時代入唐し玄奘三蔵に師事して唯識を修めたほか、多くの仏典を将来した道昭（飛鳥法興寺）にはじまり、智通・智達も入唐して玄奘や中国法相の第三祖智周に学んで法相を飛鳥にもたらし、平城遷都に伴って元興寺に移った。続いて新羅僧の智鳳・智雄・智鸞が入唐し、智周に付いて法相を学んで帰り、次いで玄昉（阿刀氏）も入唐し智周に師事して法相を修め、五〇〇〇巻からの将来本を携えて帰国。興福寺に法相を興した。興福寺からは玄昉の子と言われる秋篠寺の開基善珠（阿刀氏）、その後宣教や空海とも縁があった賢憬・修円・徳一が輩出。元興寺からは玄昉の師の義淵や空海が終生親交を重ねた僧綱所長老の護命が出ている。

こうした環境のなかで、空海は月半ばを吉野・比蘇山寺での自然智行や求聞持法の練磨に充て、残る月半分を大安寺や元興寺や東大寺や西大寺での学解仏教に充てたと思われる。とくに東大寺や西大寺では「開元釈教録」に準じた玄昉将来の経論を片っ端からひも解き、原始経典から釈尊の事蹟や無執著・無我の初期仏教を学び、「四分律」や「梵網戒」などを修め、大乗の諸法の「無我」「無自性」から「一切皆空」「縁起生」を学び、「空」が『法華経』では久遠実成の釈迦牟尼仏になり、『華厳経』では毘盧舎那・法界・真如になり、一方では「仏性」「如来蔵」「菩提心」になり、中観では「相依相待」の論理や「空・仮・中」の「三諦」となり、唯識ではアーラヤ識縁起・三界唯心となる、仏教思想の本流を学んだ。それは、『三教指帰』に引かれる『虚空蔵菩薩求聞持法経』（善無畏訳）・『方広大荘厳経』（『ラリタヴィスタラ』地婆訶羅訳）・『維摩詰所説経』（鳩摩羅什訳）・『梵網経』（『梵網経盧舎那仏説菩薩心地戒品第十』鳩摩羅什訳）・『四分律』（仏陀耶舎訳）・

『大般涅槃経』（曇無讖訳）・『妙法蓮華経』（鳩摩羅什訳）・『大乗本生心地観経』（般若三蔵訳、霊仙筆受）・『金剛般若波羅蜜経』（鳩摩羅什訳）・『仏説盂蘭盆経』（中国の偽経）・『仏地経論』（親光、玄奘訳）・『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞厳経』（般刺密帝訳）・『摩訶止観』（智顗）・『阿毘達磨倶舎論』（世親、玄奘訳）・『大智度論』（龍樹、鳩摩羅什訳）・『観仏三昧海経』（仏陀跋陀羅訳）・『大方広仏華厳経』（『六十華厳』佛陀跋陀羅訳、『八十華厳』實叉難陀訳）など二十七本の仏典を見れば明らかである。

②の、「空白の七年」に空海は密教についてどこまで理解していたか、であるが、

空海は、玄昉将来本を東大寺で、あるいはその転写本（「天平写経」）を西大寺で閲覧するなかで、善無畏訳の『虚空蔵菩薩能満諸願最勝心陀羅尼求聞持法』や善無畏・一行訳の『大毘盧舎那神変加持経』（『大日経』）や金剛智訳の『金剛頂瑜伽中略出念誦経』や善無畏訳の『蘇磨呼童子請問経』といった密教経典を知ったに相違ない。空海と『大日経』の出会いは久米寺の東塔の下に感得したことにあるが、実際に『大日経』を見たのはおそらく西大寺の「天平写経」だった。実際に読んでみて、最初の住心品は何とか読めたが、作壇法・供養法やサンスクリット発音の真言などが出てくる具縁品以下はさすがに理解不能だったにちがいなく、それが唐に留学する動機になったとも言われる。

ともあれ、「空白の七年」の空海の密教の素養は、求聞持法の熟達以外おそらくそんなレベルで推移していたに相違なく、『大日経』や『金剛頂瑜伽中略出念誦経』が説く「速疾成仏」の念誦法の理解には至っていなかったであろう。すなわち、入唐前の空海の密教は、金胎両部の念誦法や諸尊供養法など知る由もなかった。「虚しく往いて」の「虚しい」はそのことで、それが入唐してわずか一年半後には、正統密教の瑜伽観法の第八祖阿闍梨となった。この密教の充足こそが「虚しく往いて実ちて帰る」の意味ではないか。

③の、同時期の、梵字・悉曇、真言・陀羅尼・梵讃、すなわちサンスクリット語学のレベルと修学について、であるが、

空海が請来した梵字・真言讃等四十二部四十四巻を見れば、空海の梵字・悉曇、真言・陀羅尼の理解とサンスクリット語学の自信のほどがわかる。空海は長安で醴泉寺の般若三蔵のもとでサンスクリットを学んだと言われるが、『三十帖索子』の欄外空白に空海が書き入れたサンスクリット文法に関する赤入注を見ると、相当な語学力だったことがわかるとともに、入唐後の実質一年半であそこまで初心から進歩するとは考えられず、「空白の七年」に相当な時間と努力を積み重ねてこの

異国語をマスターしていたに相違ないことが読み取れる。おそらく大安寺で、インド僧もしくはサンスクリットに堪能な渡来僧に付いて、サンスクリット文字・悉曇表記・発音・文法・単語（名詞・形容詞・格変化・動詞・過去分詞・助詞・命令形など）・長行文・讃頌（ガーター）などを学んでいたに相違なく、その時の年上の学友霊仙は空海と同じく第十六次遣唐使船（第二船）で入唐し、般若三蔵のもとで訳経の筆受などをつとめた。空海のサンスクリット語学力も霊仙に同等と見てよい。

私は拙著『空海ノート』で、空海のサンスクリットのレベルを、唱える真言の意味がわかったほどと書いたことがある。唐の時代の伝法灌頂は、恵果和尚に「伝えるに人無し」と言わせたほど厳格で、一つには灌頂中に唱える真言の意味が、口で唱えながらすぐにわかるほどでなければならなかったと思われる。空海はそれができたので、般若三蔵が空海のことを恵果和尚に早々に教えていた、というのが「私は、そなたが（長安に）来ていることを知っていた。久しく待ったが、今日遇えた」の私の読みである。空海のレベルまでサンスクリット語学力を高めるのに通常十年、空海なら「空白の七年」がちょうどいいところである。

④の、「虚しく往いて実ちて帰る」の意味について、であるが、

すでに②の最後の方で述べた。「虚しく」は求聞持法（雑密）のレベルだった空海の密教、「実ちて」は伝統密教の第八祖阿闍梨のレベルになったこと。

⑤の、引いては入唐留学の目的・動機について、であるが、

私の新説では、「伝法灌頂受法のため」でもなく、「『金剛頂経』系の経疏請来のため」でもなく、「『大日経』具縁品以下受学のため」でもなく、「密教儀軌受法のため」でもなく、「最新の仏教受学のため」でもなく、「空白の七年」に充足できなかった密教の課題、すなわち金胎両部の大経の教理と瑜伽観法並びに諸尊供養法の受法だった。それによって、空海は全仏教史を俯瞰することができ、自らを釈尊にはじまる仏教史の最終段階に投企し、「三国伝灯」の仏教を背負うのである。その明確な自覚こそが、空海を心底から動かし、命がけの入唐留学を決意させた当体である。

帰国後の空海が独自に「総合」編集した空海密教は、日本の新しい鎮護国家のオペレーション・ソフトであり、同時にインド・中国・日本「三国伝灯」のユニヴァーサルなオペレーション・ソフトだった。祖師と仰ぐ不空三蔵の国家化密教

（密教ナショナリズム）と師恵果和尚の国際化密教（密教インターナショナリズム）に叶っているのである。

然らば「御請来目録」の概要であるが、

不空三蔵の訳を中心とする新訳の経典・儀軌、百四十二部、二百四十七卷。

梵字・真言讃など、密教儀軌を含む、四十二部、四十四卷。

論・疏・章など、三十二部百七十卷。

以上の三種で、二百十六部、四百六十一卷。

その他、

佛・菩薩・金剛・天神などの尊像、法曼陀羅・三昧耶曼陀羅、伝法阿闍梨などの御影、合計十鋪。

法具・仏器など道具、九種。

阿闍梨からの付嘱物、十三種。

である。

このうち目を引くのが、

経典では、不空三蔵訳（新訳）の、

金剛頂瑜伽眞實大教王經

金剛頂瑜伽般若理趣經

金剛頂瑜伽十八會指歸

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門

大孔雀明王經

雨寶陀羅尼經

施焔口餓鬼陀羅尼經

金剛頂瑜伽五祕密修行儀軌

如意輪念誦法

大虚空藏菩薩念誦法
華嚴入法界品四十二字觀門
般若理趣釋一卷
金剛頂瑜伽護摩儀軌
仁王經
仁王念誦儀軌
金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀軌
大樂金剛薩埵修行成就儀軌
不空羂索毘盧遮那佛大灌頂光明眞言
大威怒烏芻濕摩儀軌
佛説摩利支天經
大日經略攝念誦隨行法
大毘盧遮那成佛神變加持略示七支念誦隨行法
金剛頂降三世大儀軌
金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論
仁王般若陀羅尼釋
大聖天歡喜雙身毘那夜迦法
觀自在菩薩如意輪瑜伽
金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌
以下は、「貞元目録」に未記載。
釋迦牟尼佛成道在菩提樹下降魔讃
施諸餓鬼飲食儀軌一卷
菩提心義一卷
華嚴經入法界品頓證毘盧遮那字輪瑜伽儀軌

金剛頂瑜伽毘盧遮那三摩地法
金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經
蕤呬經

不空三蔵訳以外の新訳で、
般若三蔵訳の、
華厳經（『四十華厳』）
大乗理趣六波羅蜜經
守護國界主陀羅尼經
尸羅達摩三蔵訳の
十地經
無能勝三蔵訳の
大威力烏樞瑟摩明王經
旧訳で、
金剛智三蔵訳の
金剛頂瑜伽中略出念誦經
菩提留支訳の
不空羂索眞言經（第六巻・第二十巻・三十巻中欠本）

梵字、すなわちサンスクリット発音・表記の真言・陀羅尼・讃・儀軌で、
梵字大毘盧舎那胎藏大儀軌二巻
梵字胎藏曼陀羅諸尊梵名一巻
梵字金剛頂蓮花部大儀軌二巻
梵字毘盧遮那三摩地儀軌一巻

梵字普賢行願讃一卷
梵字大佛頂眞言一卷
梵字大隨求眞言一卷
梵字大寶樓閣經眞言一卷
梵字金剛藏降三世讃王一卷
梵字千臂甘露軍荼利眞言一卷
梵字吉慶讃一卷
梵字妙法蓮華經儀軌一卷
梵字不動尊儀軌一卷
梵字尊勝佛頂眞言一卷
梵字七倶胝佛母讃一卷
梵字馬頭觀音陀羅尼一卷
梵字不空羂索陀羅尼一卷
梵字千手千眼眞言一卷
梵字阿彌陀佛眞言一卷
梵字寶篋眞言一卷
梵字十六大菩薩讃一卷
梵字十六大菩薩眞言一卷
梵字大三昧耶眞實一百八名讃一卷
梵字烏芻瀀摩儀軌一卷
梵字天龍八部讃一卷
梵字十一面讃一卷
梵字金剛峯樓閣眞言并一百八名讃一卷
梵字蓮花部讃一卷

梵字悉曇章一巻

論・疏・章などで、

華厳經疏（澄觀法師撰）
法華玄義（天台智者撰）
法華文句疏（天台智者撰）
四教義（天台智者撰）
法華記（天台湛然法師記）
大毘盧遮那經疏（一行禪師撰）
金剛般若經疏（道氤法師撰）
貞元新定釋目録（圓照律師撰）
貞元新翻譯經圖記（圓照律師撰）
佛頂尊勝陀羅尼傳序
大方廣佛華厳經品會名圖
金師子章并縁起六相
悉曇字記
悉曇釋
建立壇法
金剛頂瑜伽祕密心地法門義訣
大唐大興善寺大辯正大廣智三藏表答碑

『三教指帰』から十年に満たずにして、以上の経軌を知るレベルまで空海の仏教理解が飛躍したことがわかる。これらの多くは恵果和尚のもとで得たにせよ、不空訳の密教経典・儀軌をはじめ仏教思想史理解に重要な旧訳・論・疏も選んでいるほか、天台や華厳のものにも目配りしていることが、入唐する前の空海の「空白の七年」がどんなレベルであったか

彷彿としてくる。小乗・大乗の理解、サンスクリットの語学力、そして正統密教の一部と、空海は入唐して密教の未足を充足するのに機が熟していたのである。

然るに、少し余談になるが、入唐するのに機が熟していたとすると、なぜ空海は、延暦二十二年（八〇三）四月十四日に難波ノ津を出て、大輪田泊（現在の神戸港）の沖で暴風雨に見舞われ、難波ノ津に引き返した第十六次遣唐使船に乗らず、翌延暦二十三年（八〇四）の五月十二日に出直した遣唐使船に乗ったのか、大使藤原葛野麻呂以下第十六次遣唐使団の任命はすでに延暦二十年に終っているではないか、また『続日本紀』などの史誌によれば、空海の具足戒受戒（留学の資格に必須の官僧になること）は、延暦二十三年四月七日（または九日）、東大寺戒壇院において、戒師元興寺の大法師位・唐僧の泰信律師に随ってで、出直しの遣唐使船出航にギリギリであり、とても入唐の機が熟していたとは思えないという疑問が立ちはだかる。

この疑問は至極当然であるが、私は次のように考える。

『三教指帰』から約五年、「空白の七年」のなかにあって空海は入唐留学には充分の素養を具え、延暦二十一年（八〇二）には、翌二十二年春に二十五年ぶりに遣唐使が派遣される情報もサンスクリット修学の友霊仙などから聞いていた。その時期空海は、玄昉将来の『大日経』をはじめ求聞持法の原典たる善無畏訳の『虚空蔵菩薩能満諸願最勝心陀羅尼求聞持法』や金剛智訳の『金剛頂瑜伽中略出念誦経』と格闘していたが、大安寺をはじめ南都には密教の依止師は見あたらず、独学にも限界があって、これら密典の理解が容易に進んでいなかった。わかっていたことは、具足戒受戒の戒師泰信律師から教えられた、長安に行けば誰か依るべき密教阿闍梨がいて、師資相承の口伝の機会に恵まれるはずだということだけで、来たるべき第十六次遣唐使船に乗るモチベーションには至らなかった。

然るに、延暦二十一年から二十二年にかけて、空海のなかで、釈尊にはじまる仏教史の最終段階が密教であり、密教は教理の上でも修行の上でも衆生救済の上でも華厳や天台に勝り、しかもインド・中国では一番新しい仏教であり、密教に自分を投企することが即全仏教史に相入することであるという思いが昂まり、『大日経』『金剛頂経』さらに真言・陀羅尼・儀軌の受法のために命をかけてでも入唐しなければならない現実を直視するに至った。しかし時すでにおそく、第十六次遣唐使は延暦二十年に勅命を受け、まもなく四月には難波ノ津を出航する時期になろうとしていた。空海はまだ具足戒を

受戒していない沙弥・如空のままだった。

仕方なく次の機会を待つこととし、あるいは第十六次遣唐使の帰国船に乗り来年大宰府に来るはずの唐の使者が本国に帰る船などの可能性を確めながら日を送っていたところ、出航したばかりの第十六次遣唐使船が大輪田泊（現在の神戸港）の沖で暴風雨に遭って難波ノ津に引き返し、翌年再出発となった。これを聞いた空海は、まず僧綱所の長老で終生親交を重ねた元興寺の護命や、大安寺の師僧で南都仏教の長老の勤操や、唐僧で元興寺に止住し大法師位になった泰信律師や、伊予親王の侍講で叔父の阿刀大足に相談しただろう。護命は治部省・民部省と入唐留学の特別措置で折衝し、勤操は三論の補充枠の確保に動き、泰信は唐の仏教情勢や密教情報を教え、阿刀大足は伊予親王に勅命拝受の助力を頼んだであろう。実際に請益僧・留学僧に異動があり、空海の入唐留学は現実になった。空海は急ぎ留学費用等の準備を進める一方、満を持して東大寺戒壇院において具足戒を受戒し官僧の空海となった。戒師は泰信律師が勤めた。何という奇運か、幸運か、ギリギリで一年おくれの遣唐使船に飛び乗れたのである。

この「御請来目録」を読むにあたって、「原文」を「大正新脩大藏經テキストデータベース版（大正 NO.2161）を依用した。だが、ところどころ誤記があり、「高野山アーカイブ」の「定本 御請来目録」と『弘法大師全集』第一輯・巻第一を参照しながら、私なりに直して読んだ。

「原文」に続いて「書き下し」を付した。「書き下し」に当っては『弘法大師全集』と本宗空海研究の第一人者で先輩の碩学真保龍敞師のご労作（『弘法大師 空海全集』第二巻「請来目録」）を参照した。『弘法大師全集』の訓読みや送りガナには所々納得できない箇所があり、不出来を覚悟で私独自の「書き下し」にした。

「書き下し」に続いて「私訳」を付けた。私なりの現代語訳である。「私訳」のあとの「註記」は、専門語や難解な語の解説である。できるだけ正確を期したが調べ尽くせないものや長くなるので簡略にしたものもある。ご参考になれば幸いである。

さらに、■経典等目録の末尾にある、入唐留学関連の「自伝」の部分には「付記」を付けておいた。伝統教学ではこれが定説「空海伝」になっているが、「原文」はおおむね素略のため行間を補った。伝統教学にうとい私なりに先学の研究をできるだけ探し、それらにも目を通した。多くの学恩に感謝している。誤字・誤記にはご容赦いただきたい。

■「御請来目録」　原文・書き下し・註記・私訳・付記

■表題

【原文】

上新請來經等表

【書き下し】

新たに請來せし經等を上（たてまつ）る表

【私訳】

新しく唐から請来した仏典等を献上する上申書

■上表文

【原文】

入唐學法沙門空海言。空海以去延曆二十三年、銜命留學之末、問津萬里之外、其年朧月、得到長安。二十四年二月十日、准勅配住西明寺。爰則周遊諸寺、訪擇師依、幸遇青龍寺灌頂阿闍梨法號惠果和尚、以爲師主。其大徳則大興善寺大廣智不空三藏之付法弟子也。弋鈎經律該通密藏。法之綱紀。國之所師。大師尚佛法之流布。歎生民之可拔。授我以發菩提心戒。許我以入灌頂道場。沐受明灌頂再三焉。受阿闍梨位一度也。肘行膝歩學未學。稽首接足聞不聞。幸頼國家之大造大師之慈悲。學兩部之大法。習諸尊之瑜伽。斯法也則諸佛之肝心。成佛之徑路。於國城埆於人膏腴。是故薄命不聞名。重垢不能入。印度則輸婆三藏脱躧負扆振旦則玄宗皇帝景仰忘味。從爾已還。一人三公接武耽翫。四衆萬民稽首鼓篋。密藏之宗自茲稱帝。半珠顯教靡旗面縛。

【書き下し】

入唐學法の沙門空海言す。

空海、去んじ延暦二十三年を以て命を留學の末に銜(ふく)み、津を萬里の外に問う。其の年朧月(ろうげつ)長安に到るを得。二十四年二月十日、勅に准じ西明寺に配住す。爰に則ち諸寺を周遊し師依(しえ)を訪ね擇ぶに、幸い青龍寺の灌頂阿闍梨法號惠果和尚に遇い、以て師主と爲す。其の大徳は則ち大興善寺大廣智不空三藏の付法弟子なり。經律を弋鈎(よくちょう)し密藏に該通す。法の綱紀國の師とする所なり。大師佛法の流布を尚(とうと)び生民(しょうみん)の拔く可きを歎ず。我に授くるに發菩提心戒を以てし、我に許すに灌頂道場に入るを以てす。受明灌頂に沐すること再三、阿闍梨位を受けること一度なり。肘行膝歩(ちゅうこうしっぽ)して未だ學ばざるを學び、稽首(けいしゅせつ)接足(そく)して聞かざるを聞く。幸い國家の大造大師の慈悲に頼り、兩部の大法を學び諸尊の瑜伽を習う。斯の法は則ち、諸佛の肝心にして成佛の徑路なり。國に於いては城墺人に於いては膏腴(こうゆ)なり。是の故に薄命は名を聞かず重垢(じゅうく)は入ること能わず。印度は則ち輸婆(ゆば)三藏負扆(ふい)を脱躧し、振旦は則ち玄宗皇帝景仰(けいごう)して味を忘る。爾(それ)從り已(いかん)還、一人三公は武(あしあと)を接して耽翫(たんがん)し四衆萬民は稽首して鼓篋(こきょう)す。密藏の宗を茲(ここ)自り帝と稱し、半珠(はんじゅ)の顯教は旗を靡かせ面縛す。

【私訳】

入唐学法の沙門空海が申し上げます。

空海、去る延暦二十三年、勅命を入唐留学の末席に加わる意と心得、船が入る港を万里のむこうにたずねました。そして

その年の十二月、唐の都長安に到着することができました。翌年の延暦二十四年二月十日、唐の皇帝の命によって西明寺に配され、そこに止住することになりました。そこで早速、長安城内の諸々の寺をめぐり、依るべき師を求めて訪ねては選ばせていただいていましたところ、幸い青龍寺の諸々の灌頂を授ける阿闍梨で、法号を恵果という和尚に出遇い、師僧になっていただくことができました。

その大徳は、大興善寺の大広智不空三蔵の付法の弟子でした。経蔵や律蔵を学び取り密教に広く通じていました。仏法の規範であり、国の師たる方でした。この偉大な師は、仏法が広く流伝することを尊び、民衆を苦悩から拔済すべきことをたたえる方でした。（初見の）私に発菩提心戒を授け、灌頂の道場に入ることを許可してくれました。受明灌頂を受法すること再三、阿闍梨位の伝法灌頂を一度受法しました。肘でにじり進み膝で歩くようにして、未だ学んでいないことを学び、師の足の甲に額を付けるようにして、未だ聞かざることを聞きました。幸い国王の大恩、大師の慈悲により、金胎両部の大法を学び、諸尊の瑜伽観法を習うことができました。この法は諸仏の肝心であり、成仏の道すじで、国にとっては敵の侵入を防ぐ城郭であり、人にあっては心の豊かな滋養です。それ故、幸せ薄く命の短い人はこの法の名も聞かず、煩悩の多く深い人はこの法に入ることができません。インドでは善無畏三蔵が皇位に就くことを棄て、中国では玄宗皇帝が三蔵の徳を慕い仰ぎ食事するのも忘れたくらいです。それよりこの方、皇帝とその補佐官たちは足あとを接するようにあとに続き、三蔵の密教に深く入って味わい、出家の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷及び在家の万民はこの法を額を地面につけ学びました。これより密教の宗は仏教諸宗の帝王と言われ、半分が欠けた珠のような顕教は旗をなびかせるものの、両手を後ろ手に縛られ、顔を前につき出しているようなものであります。

【註記】

①銜：口にふくむ、意をくむ。

②朧月：十二月。

③西明寺：空海が留学した唐の時代、長安城内右街の延康坊にあった壮大な仏教寺院で、インドの祇園精舎を模して造られ、奈良の大安寺はこの西明寺をモデルとしたと言われている。日本の留学僧はみなここを止宿先とし、空海はここで三十年を過し帰国する永忠（大安寺）の部屋を与えられた。空海はここで、志明・談勝ら五・六人の留学僧と親しく交わった。

④師依：依るべき師、依止師、師僧。

⑤青龍寺：空海が学んだ長安城内左街の新昌坊にあった密教寺院。創建は隋の開皇二年（五八二）、初唐に一度廃寺になったが再建され、景雲二年（七一一）に青龍寺となり、唐の中期に恵果らによって密教寺院となった。恵果の時代には国内外から弟子が集り活況を呈していた。空海の帰国後「会昌の廃仏」（八四五）によってまた廃寺となる。この間天台宗の円仁が「会昌の廃仏」の直前に青龍寺の義真から灌頂を受け、胎蔵界大法と蘇悉地経法などを受法。さらに円珍が廃仏直後に法全から密法を受法している。

⑥恵果和尚：空海の密教の師。中唐の時代、長安青龍寺の貫首。真言付法の八祖の第七祖。不空から『金剛頂経』系の密教を、善無畏の弟子玄超から『大日経』『蘇悉地経』系の密教を受法し、金・胎両部不二の密教を集大成した。代宗・徳宗・順宗の三朝の師と言われた。

⑦大興善寺：長安城（大興城）内の中心部、左街の朱雀門街に面する靖善坊にあった仏教国策の中核寺院。

⑧不空三蔵：不空金剛。金剛智三蔵の弟子。恵果和尚の師。真言付法の第六祖。『金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経（大教王経）』をはじめ『金剛頂経』系密典訳経の第一人者。鳩摩羅什・真諦・玄奘とともに四大訳経家と言われる。「安禄山の変」を機に玄宗皇帝の勅命で大興善寺に住し、降伏の修法を行うなど国家仏教に貢献して代々皇帝の帰依を集めた。

⑨弋鈎：弋はいぐるみ、獲物をからめとる道具。鈎はかぎ、獲物を引っかける道具。ここは、経典や戒律を学び取る、の意。

⑩生民：衆生。人々、民衆。

⑪發菩提心戒：三昧耶戒。

⑫受明灌頂：密教を深く修学する志をもつ者に三昧耶戒を授け、次いで灌頂道場に引入して投華得仏させ、その仏尊の真言と印を授け、密教修学の弟子とする。弟子位の灌頂と言う。空海は、恵果和尚とはじめて会った延暦二十四年（八〇五）六月十二日の翌日に胎蔵界の、七月初旬に金剛界の受明灌頂を受けている。

⑬阿闍梨位：伝法灌頂を受法した者に認定される師位。

⑭大造：国王による罪人の恩赦。大きな手柄、大きな効果。ここは中国皇帝の大恩。

⑮膏腴：膏は動物の油。腴は痩の異体字で「やせる」の意味で使われることが多いが、あぶらぎ（る）・や（せる）・ゆたかの読み方がある。ここは、密教が人にとって栄養豊富の滋養であること、引いては人が心豊かで安楽であることの喩え。

⑯重垢：煩悩の多く深い人。

⑰輸婆三蔵：善無畏三蔵。

⑱負扆：王が屏風をうしろに臣下に対すること。王位に就くこと。
⑲脱躧：躧（わらぐつ）をぬぐこと。王位を捨て出家すること。
⑳玄宗皇帝：唐の絶頂期の第六代皇帝。「開元の治」で善政を行い名声を得る。後半生は皇妃楊貴妃に溺れ政務を怠る。熱心な道教信者であると同時に仏教の奨励者でもあった。
㉑景仰：人格の高い人の徳を慕い仰ぐこと。
㉒已還：この方。以後、以降。
㉓一人三公：一人の皇帝と皇帝を補佐する三人の朝廷高官（三人の役職名は時代によって替る）。
㉔武：あしあと。
㉕耽翫：深く入り味わうこと。
㉖四衆：比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷。
㉗鼓篋：学校で勉強すること。ここは善無畏三蔵の密教を学ぶこと。
㉘半珠：半分の珠。半分欠けている、の意。
㉙面縛：両手を後ろ手に縛られ、顔を前につきだすこと。

【原文】

夫以。鳳凰于飛必窺堯舜。佛法行藏逐時卷舒。今則一百餘部金剛乗教。兩部大曼荼羅海會請來見到。雖云波濤渺漠風雨漂漂。越彼鯨海平達聖境。是則聖力之所能也。伏惟皇帝陛下至徳如天。佛日高轉。人之父佛之化。悲蒼生而濡足。鍾佛囑而垂衣。以陛下新御旋璣。新譯之經自遠新戻。以陛下慈育海内。海會之像過海而來也。恰似符契。非聖人測矣。空海雖闕期之罪死而有餘。竊喜難得之法生而請來。不任一懼一喜之至。謹附判官正六位上行大宰大監高階眞人遠成。奉表以聞。并請來新譯經等目録一卷。且以奉進輕黷威嚴。伏增戰越。沙門空海誠恐誠惶謹言。大同元年十月二十二日。入唐學法沙門空海上表。

【書き下し】

夫れ以んみれば、鳳凰于飛しては必ず堯舜を窺う。佛法の行藏時を逐い卷舒す。今則ち一百餘部の金剛乘教、兩部の大曼荼羅海會請來して見に到る。波濤は湲漠にして風雨に漂漂たりと云うと雖も、彼の鯨海を越え平に聖境に達す。是れ則ち聖力の能くする所なり。伏して惟みるに皇帝陛下の至徳、天の如く佛日高く轉ず。人の父、佛の化なり。蒼生を悲しんで足を濡し、佛囑に鍾りて垂衣す。陛下の新たに旋璣に御するを以て、新譯の經遠くより新たに戻る。陛下の海内を慈育するを以て、海會の像海を過ぎて來れり。恰も符契に似たり。聖に非ずんば人測からん。空海闕期の罪は死して餘り有ると雖も、竊かに喜こぶは難得の法生きて請來せることなり。一たびは懼れ一たびは喜こぶの至りに任えず。謹んで判官正六位上行大宰大監高階眞人遠成に附して、奉表以聞す。并びに請來せる新譯の經等の目録一卷且つ以て奉進す。輕しく威嚴を黷す。伏して戰越を增す。沙門空海誠恐誠惶謹しんで言す。大同元年十月二十二日。入唐學法沙門空海上表す。

【私訳】

思いますに、鳳（雄鳥）と凰（雌鳥）がつがいで睦まじく飛ぶように、徳の高い天子に聡明な臣下が集ると、必ず古代の伝説上の名君堯・舜に思いが至るものです。仏法が広く行われたり衰えて隠れてしまうのも、時代とともに経巻を巻いたり（読まなかったり）延ばしたり（読んだり）するようなものです。今、私は百余部の密教経典と金胎両部の大曼荼羅海会を請来し、披見できるようにいたしました。東シナ海の高い波は大きくうねって果てしなく広く、吹く風降る雨にただ私の乗った帰国船は漂い流れたとは言え、あの巨大な海を越え無事に陛下の治められる日本に到達いたしました。これは陛下の神聖なお力が可能にしたものであります。

平伏して考えますに、皇帝陛下の高いお徳は天のように広大無辺で、仏の放つ（仏智の）光も高きところから転じる（転法する）のであります。（皇帝陛下は）人々の父であり仏の応化であります。一般国民に慈悲を垂れ（世間の泥水に）足を濡らし、仏の付嘱に応えて国を治めています。陛下が新たに善政を行われましたので、新訳の仏典が遠くから新しくもたらされました。陛下が国内の人々を慈悲をもって育てておられるので、両部曼陀羅海会の尊像は海を越えて来たりました。まるで二つが一つに合わさる割符に似ています。神聖な陛下でなければ世俗の人々には推し測ることができません。空海が在唐二十年の留学義務を守らず早期に帰国した国禁破りの罪は、死んでお詫びしてもなお余りあるものでありますが、生きて得難き仏法をこの国にもたらすことができたことを密かに喜んでおります。ある時は恐れおののき、ある時は歓び、その至りにどうすることもできません。謹んで（京に帰る）正六位上行大宰大監高階貞人遠成に託し、この表を奏上いたします。また、請来した新訳の経巻などの目録一巻を添えて進呈いたします。軽々しく陛下の威厳を汚してしまいました。平伏して戦慄を増しております。沙門空海、誠恐誠惶、謹んで申し上げます。大同元年十月二十二日。

【註記】

①鳳凰于飛：鳳は雄、凰は雌。つがいで飛ぶ夫婦円満の喩え。鳳凰が飛ぶとほかの鳥もつられて飛ぶことになぞらえ、徳の高い天子に聡明な部下が集る喩え。

②堯舜：古代中国の神話に登場する聡明な天子、堯・舜。

③行藏：仏法が広く行われたり衰えて隠れてしまうこと。

④卷舒：巻くことと伸ばすこと。縮むことと伸びること、退くことと進むこと。伸縮、進退。

⑤湲漠：湲は水がゆるやかにめぐること。漠は果てしなく広いこと。

⑥漂漂：流れ漂うこと、漂流すること。

⑦聖境：神聖な場所、聖域。ここは天皇が治める日本。

⑧蒼生：衆生。ここでは国民。

⑨佛囑：仏の付嘱、付託。

⑩垂衣：垂れ衣（ぎぬ）。外出の際貴人が顔をかくすため笠から垂れ下げた布。天下を治めること。摂政の別称。

⑪旋璣：旋は璇で美しい玉の名。璣は機で回転する機械。旋璣で美しい玉で飾られた天文観測の機械の意。天子が天の運行

に従って善政を行ったことから転じて。天子の善政の意。

⑫符契：割符。後日二つを合わせて証明とすること。

⑬闕期之罪：二十年という留学僧の留学義務を守らず帰国したこと。

⑭大宰大監：大宰府の判官の上位二人。

⑮高階眞人遠成：空海が留学二十年の義務を破って帰国する際、乗船した遣唐使船の判官であり、空海から託された「御請来目録」を京の朝廷に上奏した平安初期の朝廷官人。延暦二十三年の第十六次遣唐使船団では第四船の判官で、東シナ海で海難に遭ったのち、那ノ津（博多）へ引き返し、修理した第四船で再度入唐朝貢した。

⑯奉表以聞：奏上文の結語の常套句。

⑰戰越：戦慄。おそれおののき。

⑱誠恐誠惶：心から恐れかしこまること。臣下が天子に意見などを奏上する時の決り文句。

■経典等目録

【原文】

入唐學法沙門空海大同元年請來經律論疏章傳記。并佛菩薩金剛天等像。三昧耶曼陀羅。法曼陀羅。傳法阿闍梨等影及道具。

竝阿闍梨付囑物等目録都合六種。就中

新譯等經都一百四十二部二百四十七卷

梵字眞言讃等都四十二部四十四卷

論疏章等都三十二部一百七十卷

已上三種總二百一十六部四百六十一卷

佛菩薩金剛天等像。法曼陀羅。三昧耶曼陀羅。并傳法阿闍梨等影共一十鋪

道具九種

阿闍梨付囑物一十三種

新譯經

金剛頂瑜伽眞實大教王經三卷（三御四十二紙）

金剛頂瑜伽般若理趣經一卷（八紙）

觀自在菩薩授記經一卷（一御十二紙）

瑜伽念珠經一卷（二紙）

奇特佛頂經三卷（六十八紙）

觀自在菩薩最勝明王心經一卷（一御十二紙）

金剛頂瑜伽文殊師利菩薩經一卷（二紙）

阿唎多羅阿嚕力經一卷（十一紙）

普賢行願讃一卷（五紙）

地藏菩薩問法身讃一卷（五紙）

出生無邊門經一卷（十紙）

大吉祥天女經一卷（七紙）
底哩三昧耶經一卷（十四紙）
十一面觀自在菩薩經三卷（廿四紙）
吉祥天女十二名號經一卷（二紙）
金剛頂瑜伽十八會指歸一卷（九紙）
金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門一卷（一御十三紙）
菩卷場所説一字頂輪王經五卷（七十八紙）
寶篋經一卷（六紙）
金剛壽命陀羅尼經一卷（三紙）
大孔雀明王經三卷（五十紙）
大雲輪請雨經二卷（二十御廿四紙）
雨寶陀羅尼經一卷（五紙）
囊麌梨童女經一卷（四紙）
稻幹喩經一卷（八紙）
大寶廣博樓閣經三卷（四十五紙）
菩提場莊嚴經一卷（二十御廿二紙）
能淨一切眼疾病陀羅尼經一卷（二紙）
施焰口餓鬼陀羅尼經一卷（四紙）
三十五佛名經一卷（二紙）
八大菩薩曼荼羅經一卷（三紙）
葉衣觀自在菩薩陀羅尼經一卷（八紙）
訶利帝母經一卷（三紙）
毘沙門天王經一卷（五紙半）
觀自在菩薩説普賢陀羅尼經一卷（七紙）

文殊問字母品一卷（三紙）
金剛頂蓮華部心念誦法一卷（二十御廿三紙）
金剛頂瑜伽千手千眼觀自在念誦法一卷（十八紙）
無量壽如來念誦儀軌一卷（十二紙）
阿閦如來念誦法一卷（二十紙）
佛頂尊勝念誦法一卷（八紙）
金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法一卷（六紙）
金剛王菩薩念誦法一卷（十二紙）
普賢金剛薩埵念誦法一卷（十二紙）
金剛頂瑜伽五祕密修行儀軌一卷（十二紙）
金剛壽命念誦法一卷（三紙）
一字頂輪王瑜伽經一卷（十二紙）
一字佛頂輪王念誦儀軌一卷（十二紙）
如意輪念誦法一卷（八紙）
大虛空藏菩薩念誦法一卷（五紙）
瑜伽蓮華部念誦法一卷（七紙）
聖觀自在菩薩心眞言觀行儀軌一卷（六紙）
甘露軍吒利喩伽念誦法一卷（十八紙）
華嚴入法界品四十二字觀門一卷（六紙）
文殊讚法身禮一卷（三紙）
受菩提心戒儀一卷（三紙）
金剛頂瑜伽三十七尊禮一卷（四紙）
般若理趣釋一卷（三十二紙）
大漫荼羅十七尊釋一卷（三紙）

金剛頂瑜伽護摩儀軌一卷（八紙）
都部陀羅尼目一卷（四紙）
大乘縁生輪一卷（十紙）
大虚空藏菩薩所問經八卷（一百七紙）
仁王經二卷（三十五紙）
密嚴經三卷（五十一紙）
仁王念誦儀軌一卷（十九紙）
大聖文殊師利菩薩佛刹功德莊嚴經三卷（五十一紙）
成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌一卷（廿五紙）
金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀軌一卷（十一紙）
大樂金剛薩埵修行成就儀軌一卷（十五紙）
大藥叉女歡喜母并愛子成就法一卷（九紙）
大佛頂如來放光悉怛他鉢陀羅陀羅尼一卷
普遍光明大隨求陀羅尼經一卷（三十二紙）
金剛頂超勝三界經説文殊五字眞言勝相一卷（三紙）
五字陀羅尼頌一卷（八紙）
聖閻曼德迦威怒王立成大神驗念誦法一卷（五紙）
文殊師利菩薩根本大教王金翅鳥王品一卷（三紙）
不空羂索毘盧遮那佛大灌頂光明眞言一卷（二紙）
聖迦抳忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經三卷（廿八紙）
大威怒烏芻濕摩儀軌一卷（十紙）
佛説摩利支天經一卷（四紙）
佛爲優填王説王法政論經一卷（九紙）
佛説一髻尊陀羅尼經一卷（十四紙）

速疾立驗摩醯首羅天説迦樓羅阿尾奢法一卷（四紙）
大日經略攝念誦隨行法一卷（二紙）
大毘盧遮那成佛神變加持略示七支念誦隨行法一卷（三紙）
木槵經一卷（一紙）
金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩儀軌供養法品一卷（十四紙）
曼殊室唎童子菩薩五字瑜伽法一卷（二紙）
金剛頂降三世大儀軌一卷（四紙）
文殊師利菩薩及諸仙所説吉凶時日善惡宿曜經二卷（四十紙）
金剛頂經觀自在王如來修行法一卷（六紙）
金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論一卷（七紙）
修習般若波羅蜜多菩薩觀行念誦儀軌一卷（七紙）
瑜伽金剛頂經釋字母品一卷（二紙）
仁王般若陀羅尼釋一卷（七紙）
觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門一卷（十二紙）
佛説大孔雀明王畫像壇場儀軌一卷（四紙）
金剛手光明灌頂經最勝摩印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品一卷（十一紙）
末利支提婆華鬘經一卷（一御十四紙）
大聖天歡喜雙身毘那夜迦法一卷（三紙）
觀自在菩薩如意輪瑜伽一卷（八紙）
金輪王佛頂略念誦法一卷（三紙）
金剛頂瑜伽降三世成就極深密門一卷（三紙）
金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌一卷（十三紙）
已下未載貞元目録
釋迦牟尼佛成道在菩提樹下降魔讃一卷

氷迦羅天經一卷
施諸餓鬼飲食儀軌一卷
梵天擇地法一卷
佛説出生無邊門陀羅尼儀軌一卷
轉法輪菩薩法一卷
如意輪觀門義注祕決一卷
菩提心義一卷
華嚴經入法界品頓證毘盧遮那字輪瑜伽儀軌一卷
金剛頂瑜伽毘盧遮那三摩地法一卷（十五紙）
金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經一卷
大日經供養儀式一卷
蕤呬經三卷
右一百一十八部一百五十卷。大唐特進試鴻臚卿加開府儀同三司封肅國公贈司空謚大辯正大廣智不空三藏和尚譯

【書き下し】
入唐學法の沙門空海、大同元年請來せる經・律・論・疏・章・傳記、并せて佛・菩薩・金剛・天等の像、三昧耶曼陀羅、法曼陀羅、傳法の阿闍梨等の影及道具、竝びに阿闍梨付囑物等の目録、都合六種。就中、
新譯等經、すべて一百四十二部二百四十七卷
梵字・眞言讃等、すべて四十二部四十四卷
論・疏・章等、すべて三十二部一百七十卷
已上三種、總じて二百一十六部四百六十一卷。
佛・菩薩・金剛・天等像、法曼陀羅、三昧耶曼陀羅、并せて傳法の阿闍梨等の影、共に一十鋪。
道具九種。
阿闍梨付囑物一十三種。

新譯の經

金剛頂瑜伽眞實大教王經三卷（三御四十二紙）
金剛頂瑜伽般若理趣經一卷（八紙）
觀自在菩薩授記經一卷（一御十二紙）
瑜伽念珠經一卷（二紙）
奇特（きどく）佛頂經三卷（六十八紙）
觀自在菩薩最勝明王心經一卷（一御十二紙）
金剛頂瑜伽文殊師利菩薩經一卷（二紙）
阿唎多羅阿嚕力（ありたらあろりき）經一卷（十一紙）
普賢行願讃一卷（五紙）
地藏菩薩問法身讃一卷（五紙）
出生無邊門經一卷（十紙）
大吉祥天女經一卷（七紙）
底哩（ちり）三昧耶經一卷（十四紙）
十一面觀自在菩薩經三卷（廿四紙）
吉祥天女十二名號經一卷（二紙）
金剛頂瑜伽十八會（じゅうはって）指歸一卷（九紙）
金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位（しょうい）法門一卷（一御十三紙）
菩提場所說一字頂輪王經五卷（七十八紙）

寶篋（ほうきょう）經一卷（六紙）
金剛壽命陀羅尼經一卷（三紙）
大孔雀明王經三卷（五十紙）
大雲輪請雨（しょうう）經二卷（二十御廿四紙）
雨寶（うほう）陀羅尼經一卷（五紙）
囊麌梨童女（じょうぐりどうにょ）經一卷（四紙）
稻穀喩（とうかんゆ）經一卷（八紙）
大寶廣博（こうばく）樓閣經三卷（四十五紙）
菩提場莊嚴經一卷（二十御廿二紙）
能淨一切眼（疾病）陀羅尼經一卷（二紙）
施焰口（えんく）餓鬼陀羅尼經一卷（四紙）
三十五佛名經一卷（二紙）
八大菩薩曼荼羅經一卷（三紙）
葉衣觀自在菩薩陀羅尼經一卷（八紙）
訶利帝母（かりていも）經一卷（三紙）
毘沙門天王經一卷（五紙半）

觀自在菩薩説普賢陀羅尼經一卷（七紙）
文殊問字母品一卷（三紙）
金剛頂蓮華部心念誦法一卷（二十御廿三紙）
金剛頂瑜伽千手千眼觀自在念誦法一卷（十八紙）
無量壽如來念誦儀軌一卷（十二紙）
阿閦如來念誦法一卷（二十紙）
佛頂尊勝念誦法一卷（八紙）
金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法一卷（六紙）
金剛王菩薩念誦法一卷（十二紙）
普賢金剛薩埵念誦法一卷（十二紙）
金剛頂瑜伽五祕密修行儀軌一卷（十二紙）
金剛壽命念誦法一卷（三紙）
一字頂輪王瑜伽經一卷（十二紙）
一字佛頂輪王念誦儀軌一卷（十二紙）
如意輪念誦法一卷（八紙）
大虚空藏菩薩念誦法一卷（五紙）
瑜伽蓮華部念誦法一卷（七紙）
聖觀自在菩薩心眞言觀行儀軌一卷（六紙）
甘露軍吒利喩伽念誦法一卷（十八紙）
華嚴入法界品四十二字觀門一卷（六紙）

文殊讃法身禮一卷（三紙）
受菩提心戒儀一卷（三紙）
金剛頂瑜伽三十七尊禮一卷（四紙）
般若理趣釋一卷（三十二紙）
大漫荼羅十七尊釋一卷（三紙）
金剛頂瑜伽護摩儀軌一卷（八紙）
都部陀羅尼目一卷（四紙）
大乘縁生輪一卷（十紙）
大虚空藏菩薩所問經八卷（一百七紙）
仁王經二卷（三十五紙）
密嚴經三卷（五十一紙）
仁王念誦儀軌一卷（十九紙）
大聖文殊師利菩薩佛刹功徳莊嚴經三卷（五十一紙）
成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌一卷（廿五紙）
金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀軌一卷（十一紙）
大樂金剛薩埵修行成就儀軌一卷（十五紙）
大藥叉女歡喜母并愛子成就法一卷（九紙）
大佛頂如來放光悉怛他鉢陀羅陀羅尼一卷

普遍光明大隨求陀羅尼經一卷（三十二紙）
金剛頂超勝三界經説文殊五字眞言勝相一卷（三紙）
五字陀羅尼頌一卷（八紙）
聖閻曼徳迦威怒王立成大神驗念誦法一卷（五紙）
文殊師利菩薩根本大教王金翅鳥王品一卷（三紙）
不空羂索毘盧遮那佛大灌頂光明眞言一卷（二紙）
聖迦抳忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經三卷（廿八紙）
大威怒烏芻濕摩儀軌一卷（十紙）
佛説摩利支天經一卷（四紙）
佛爲優填王説王法政論經一卷（九紙）
佛説一髻尊陀羅尼經一卷（十四紙）
速疾立驗摩醯首羅天説迦樓羅阿尾奢法一卷（四紙）

大日經略（りゃくしょう）攝念誦隨（ずいぎょう）行法一卷（二紙）

大毘盧遮那成佛神變加持略示七支（しちし）念誦隨行法一卷（三紙）

木槿（もくげん）經一卷（一紙）

金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩儀軌供養法品一卷（十四紙）

曼殊室（まんじゅしつ）唎童子菩薩五字瑜伽法一卷（二紙）

金剛頂降三世大儀軌一卷（四紙）

文殊師利菩薩及諸仙所説吉凶時日（じじつ）善惡宿（しゅくよう）曜經二卷（四十紙）

金剛頂經觀自在王如來修行法一卷（六紙）

金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提（ほつあのくたらさんみゃくさんぼだいしん）心論一卷（七紙）

修習（しゅうじゅ）般若波羅蜜多菩薩觀行（かんぎょう）念誦儀軌一卷（七紙）

瑜伽金剛頂經釋字母（しゃくじも）品一卷（二紙）

仁王般若陀羅尼釋一卷（七紙）

觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門一卷（十二紙）

佛説大孔雀明王畫像壇場儀軌一卷（四紙）

金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊（りゅういんしょうむどうそん）大威怒王念誦儀軌法品一卷（十一紙）

末利支提婆華鬘經一巻（一御十四紙）

大聖天歓喜雙身毘那夜迦法一巻（三紙）

観自在菩薩如意輪瑜伽一巻（八紙）

金輪王佛頂略念誦法一巻（三紙）

金剛頂瑜伽降三世成就極深密門一巻（三紙）

金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌一巻（十三紙）

已下、貞元目録に未だ載せず。

釋迦牟尼佛成道在菩提樹下降魔讃一巻

氷迦羅天經一巻

施諸餓鬼飲食儀軌一巻

梵天擇地法一巻

佛説出生無邊門陀羅尼儀軌一巻

轉法輪菩薩法一巻

如意輪觀門義注祕決一巻
菩提心義一巻
華厳經入法界品頓證毘盧遮那字輪瑜伽儀軌一巻
金剛頂瑜伽毘盧遮那三摩地法一巻（十五紙）
金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經一巻
大日經供養儀式一巻
蕤呬（耶）經三巻

右、一百一十八部一百五十巻。

大唐の特進試鴻臚卿であり、開府儀同三司を加え、肅國公の爵位にも封じられ、司空の官位を贈られ、謚大辯正、大廣智不空三藏和尚の譯であります。

【私訳】

私、入唐学法の沙門空海が、大同元年に請来した経・律・論・疏・章・伝記、そして仏・菩薩・金剛・天神などの尊像、三昧耶曼陀羅、法曼陀羅、伝法阿闍梨などの御影や道具、さらには恵果阿闍梨からの付嘱物などの目録は、全部で六種であります。そのうち、新訳などの経典が全てで一四二部二四七巻。梵字・真言讃などが全てで四二部四四巻。論・疏・章などが全てで三二部一七〇巻。以上の三種は、全部で二一六部四六一巻になります。また、仏・菩薩・金剛・天神などの尊像、法曼陀羅、三昧耶曼陀羅、さらに伝法阿闍梨などの御影が、合せて一十鋪、道具が九種、恵果阿闍梨からの付嘱物が十三種です。

また経典のうち、新訳の経典は、金剛頂瑜伽眞實大教王經（『金剛頂経』）三巻、金剛頂瑜伽般若理趣經（『般若理趣経』）一巻、金剛頂瑜伽十八會指歸一巻、金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門一巻、雨寶陀羅尼經一巻、施焔口餓鬼陀羅尼經一巻、

華厳入法界品四十二字觀門一卷、般若理趣釋一卷、仁王經二卷、仁王念誦儀軌一卷、不空羂索毘盧遮那佛大灌頂光明眞言一卷など、一一八部一五〇卷であります。これらは、大唐の特進試の鴻臚寺長官であり、開府儀同三司を加えて皇帝より粛国公の爵位に封じられ、司空の官位も贈られ、大辨正・大廣智三蔵と諡された不空和尚の訳であります。

【註記】

①貞元目録：『貞元新定釈教目録』（唐の円照編）。『開元釈教目録』（唐の智昇編）『続開元釈教目録』（唐の円照編）につづく中国の仏典目録。編者の円照は空海も交わったと思われる長安の西明寺の学僧。

②特進試：特進は中国の官位、正二位。試は試補・試用の意。

③鴻臚卿：外国からの賓客を接待する迎賓館の鴻臚寺の長官。不空は玄宗の勅により鴻臚寺に住し、永泰元年（七六五）に特進試鴻臚卿となる。

④（加）開府儀同三司：大暦九年（七七四）、開府儀同三司を加え、粛國公に封じられた。開府は役所を設けて官職を置くこと。転じてそれを許された三公（太尉・司徒・司空）。儀同三司は儀礼上の格式が三司（三公）と同等の意。

⑤（封）粛國公：唐代の爵位制で、粛國公は従一品の爵位。

⑥（贈）司空：司空は唐代の官名で、天子を補佐する三公の一人。唐代の沙門勅葬の習いにより死後贈与された贈官で、贈司空。

⑦（諡）大辯正：代宗の勅葬による不空の死後贈諡号。

⑧大廣智三蔵：代宗の勅葬による不空の死後贈諡号。

【原文】

法海一味隨機淺深。五乘分鑣逐器頓漸。頓教之中有顯有密。於密藏也或源或派。古之法匠泳派攀業。今之所傳拔杍竭源。何以故。昔金剛薩埵親受遍遍照如來。數百歳後授龍猛菩薩。龍猛菩薩授龍智阿闍梨。龍智阿闍梨授金剛智阿闍梨。金剛智三藏大唐開元中始扣五部。雖云一人宗仰。不能廣流。唯有我祖大廣智阿闍梨。初受金剛智三藏。更詣南天竺龍智阿闍梨所。括囊十八會瑜伽。研窮胎藏等密藏。天寶中却歸大唐。干時玄宗皇帝始受灌頂。屈尊師資。自降粛宗代宗相續受法。禁内則建神龍精舍。城中則普開灌頂壇。一人百寮臨壇受灌頂。四衆群生膝歩學密藏。密藏之宗是日欝興。灌頂之法自茲接軫。又

夫顕教則談三大之遠劫。密藏則期 十六之大生。遲速勝劣猶如神通跛驢。仰善之客庶曉其趣矣。教之優劣法之濫觴。如金剛薩埵五祕密儀軌。及大辯正三藏表答等中廣説。

【書き下し】

法海は一味なりて機に隨って淺深あり。五乘は鑣を分って器を逐て頓漸あり。頓教の中に顯有り密有り。密藏に於いて或いは源、或いは派あり。古の法匠は派を泳ぎ業に攀づ。今の傳ふる所は柢を抜きて源を竭す。何を以っての故となれば、昔、金剛薩埵親ら遍照如來に受け、數百歳の後龍猛菩薩に授く。龍猛菩薩は龍智阿闍梨に授く。龍智阿闍梨は金剛智阿闍梨に授く。金剛智三藏は大唐の開元中に始めて五部を扣つ。一人宗仰すと云うと雖も、流れを廣くすること能わず。唯だ我が祖大廣智阿闍梨有って、初め金剛智三藏に受く。更に南天竺の龍智阿闍梨の所に詣で、十八會瑜伽を括囊し、胎藏等の密藏を研き窮めて、天寶中に大唐に却いて歸る。時に玄宗皇帝始めて灌頂を受け、屈尊して師資たりし自り降、肅宗・代宗相續いて受法す。禁内には則ち神龍の精舍を建て、城中には則ち普く灌頂壇を開く。一人百寮壇に臨み灌頂を受く。四衆・群生は膝歩して密藏を學び、密藏の宗は是の日欝に興る。灌頂の法は茲自り軫を接す。又、夫れ顯教は則ち三大遠劫を談じ、密藏は則ち十六大生を期す。遲速・勝劣は猶神通と跛驢との如し。善を仰ぐの客、庶は其の趣を曉れ。教の優劣、法の濫觴、金剛薩埵五祕密の儀軌及び大辯正三藏の表答等の中に廣く説くが如し。

【私訳】

海のように広大無辺な仏智の真実世界においては生仏一如、聖俗不二、自他平等でありますが、人の機根によって教えに浅い深いがあります。菩薩・縁覚・声聞・天・人の五乗は、馬の口輪すなわちそれぞれ乗り物（修学）の進み方を分けていまして、つまり人の器によってサトリに速い遅いがあります。サトリが速い教えに顯教と密教おtがあり、密教のなかには、あるいは本源がありあるいは枝派があります。古い時代の学匠は枝派をうまく渡り、生業を攀じ登っていました。今私が伝えた所は根本を選び抜いて根源を極めたものです。何故ならば、昔、金剛薩埵が大日如来から直説受法し、数百年の後龍猛菩薩に授け、龍猛菩薩は龍智阿闍梨に授け、龍智阿闍梨は金剛智阿闍梨に授け、金剛智三藏は大唐の開元期にはじめて金剛界五部の教えの先鞭を中国にもたらしました。一人玄宗皇帝だけがこれを尊ぶとしても、この教えが世間に広く伝わることは不可能です。ただ、私の祖師大広智不空三藏がおられて、はじめ金剛智三藏に受法し、さらに南インドの龍智阿闍梨のもとに参じて、十八会の『金剛頂経』をすべて含んで理解し、胎蔵界ほかの密教も研鑽し究め、天宝期に大唐に帰りました。時に、玄宗皇帝ははじめて灌頂を受け、不空三藏に膝を屈して尊崇の念を表し、師僧と弟子の関係を持ってよりこの方、粛宗・代宗もまた続けて受法しました。内裏には神龍精舎が建てられ、長安城中には至るところに灌頂壇を開きました。皇帝および文武百官は灌頂壇に入って灌頂を受けました。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷や一般の民衆は神妙に膝歩きまでして密教を学び、密教という宗はこの期に盛んに振興しました。灌頂の法門もここから次々とあとを絶ちませんでした。また、顕教はサトリに至るまで三大阿僧祇劫という永遠の時間がかかる修行を説き、密教は金剛界十六大菩薩の出生を期すものです。サトリへの遅速やサトリの優劣は神通力の速さとロバの歩みの鈍さに似ています。善きことを仰ぐ人は、願わくはこの趣旨を洞察してください。教えの優劣と密法の起源は、『金剛頂瑜伽金剛薩埵五祕密修行念誦儀軌』や『大弁正広智三藏和上表制集』に詳しく説かれている通りです。

【註記】

①法海一味：海のように広大無辺の仏法の世界では、仏智の真実世界において生仏一如、聖俗不二、自他平等の意。
②五乗：菩薩乗・縁覚乗・声聞乗・天乗・人乗、または仏乗・菩薩乗・縁覚乗・声聞乗・人天乗。
③鑣：口輪。手綱を付けるため馬の口のかませる金具。
④頓漸：頓悟（速疾な成仏）と漸悟（長い修行の結果の成仏）

⑤顯：顕教。
⑥密：密教。
⑦柢：根、根本、根源。「柢」「桙」（遣らい）とする異本もある。ここは『弘法大師全集』によって「柢」と読む。
⑧五部：金剛界の仏部・金剛部・宝部・蓮華部・羯磨部。
⑨扣：叩く、打つ。「うつ」に、獣が自分の体臭を木や道に付けて縄張りとする意味があり、道筋を付ける、先鞭を付けるといった意味に解釈できる。
⑩十八會瑜伽：『金剛頂経』。
⑪括嚢：ふくろの口を結ぶこと。含むこと。転じて理解すること。
⑫四衆：比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷。
⑬三大遠劫：三大阿僧祇劫。菩薩が発心してサトリを得るまでの五十位の修行に要する三段階の時間。一阿僧祇は一般的に十の五十六乗。すなわち無時間的永遠の時間。
⑭十六大生：金剛界の十六大菩薩（金剛薩埵・金剛王・金剛愛・金剛喜・金剛宝・金剛光・金剛幢・金剛笑・金剛法・金剛利・金剛因・金剛語・金剛業・金剛護・金剛牙・金剛拳）の出生。十六大菩薩は、毘盧遮那如来が五相成身観によって、自利を円満し、大慈悲によって心中に得た大菩提を利他のために十六の相に開示したもの。
⑮跛驢：跛は足が不自由なこと。驢はろば。足の不自由なろば。転じて無能の意。
⑯濫觴：物事のはじまり、起源。
⑰金剛薩埵五祕密儀軌：『金剛頂瑜伽金剛薩埵五祕密修行念誦儀軌』
⑱大辯正三藏表答等：『大弁正広智三蔵和上表制集』

【原文】

新譯

華嚴經一部四十卷（六百一十二紙）
大乘理趣六波羅蜜經一部十卷（一百六十紙）
守護國界主陀羅尼經一部十卷

造塔延命功徳經一卷
右四部六十一卷般若三藏譯
十力經一卷
右一部勿堤犀魚三藏譯
迴向輪經一卷
十地經九卷
右二部十卷尸羅達摩三藏譯
大威力烏樞瑟摩明王經二卷（三十五紙）
穢迹金剛説神通大滿陀羅尼法術靈要門一卷（五紙）
右二部三卷無能勝三藏譯

舊譯經
金剛頂毘盧遮那一百八尊法身契印一卷
右無畏三藏譯
金剛頂瑜伽中略出念誦經一部四卷（八十一紙）
不動尊使者祕密法一卷
右二部五卷金剛智三藏譯
佛心經二卷
不空羂索眞言經二卷（第六卷・第二十卷・三十卷中闕本）
右二部三卷菩提留支三藏譯
諸佛心陀羅尼經一卷
能滅衆罪千轉陀羅尼經一卷
右二部二卷玄奘三藏譯
大方廣菩薩藏經中文殊師利根本一字陀羅尼法一卷

右阿眞儞耶三藏譯

摩訶馀室囉末那野提婆喝羅闍陀羅尼儀軌一卷

右般若輪三藏譯

華嚴經心陀羅尼一卷

右實叉難陀三藏譯

文殊滅婬欲我慢陀羅尼一卷

使呪法經一卷

毘那耶經一卷

金剛部元帥大將阿吒婆俱經三卷

伽馱金剛眞言一卷

右二十四部九十七卷。或近譯未傳此間。或舊譯名來實闕。古人所未傳略在斯中。

【書き下し】

新譯

華嚴經一部四十卷（六百一十二紙）

大乘理趣六波羅蜜經一部十卷（一百六十紙）

守護國界主陀羅尼經一部十卷

造塔延命功德經一卷

右の四部六十一卷、般若三藏の譯。

十力經一卷

右の一部、勿堤犀魚三藏の譯。

迴向輪經一卷

十地(じゅうち)經九卷

右の二部十卷、尸羅達摩(しらだるま)三藏の譯。

大威力烏樞瑟摩(うすさま)明王經二卷（三十五紙）

穢迹(えじゃく)金剛説神通(じんづう)大滿陀羅尼法術靈要(りょうよう)門一卷（五紙）

右の二部三卷、無能勝(むのうしょう)三藏の譯。

舊譯(くやく)の經

金剛頂毘盧遮那一百八尊法身契印(げいいん)一卷

右、無畏三藏の譯。

金剛頂瑜伽中略出念誦經一部四卷（八十一紙）

不動尊使者祕密法一卷

右の二部五卷、金剛智三藏の譯。

佛心經二卷

不空羂索眞言經二卷（第六卷・第二十卷・三十卷中闕本）

右の二部三卷、菩提留支三藏の譯。

諸佛心陀羅尼經一卷

能滅衆罪千轉陀羅尼經一卷

右の二部二卷、玄奘三藏の譯。

大方廣菩薩藏經中文殊師利根本一字陀羅尼法一卷

右、阿眞爾耶三藏の譯。

摩訶馀室囉末那野提婆喝羅闍羅尼儀軌一卷

右、般若輪三藏の譯。

華嚴經心陀羅尼一卷

右、實叉難陀三藏の譯。

文殊滅婬欲我慢陀羅尼一卷

使呪法經一卷

毘那耶經一卷

金剛部元帥大將阿吒婆倶經三卷

伽馱金剛眞言一卷

右、二十四部九十七卷。

或いは近譯にして未だ此の間に傳わらず。或いは舊譯にして名は來りて實は闕く。古人の未だ傳えざる所、略斯の中に在

り。

【私訳】

以下は、般若三蔵訳の『四十華厳』など、不空三蔵以外の最近漢訳された新訳の経典です。

経典名　略。

以下は、金剛智三蔵訳などによってすでに漢訳されていた旧訳経典です。

経典名　略。

以上の二十四部九十七巻は、最近の訳でまだ伝わっていないか、旧訳ですが経名だけ伝わって中身が欠けていたものです。先人がまだ伝えていなかったものはほぼ、このなかに入れてあります。

【原文】

梵字

梵字大毘盧舍那胎藏大儀軌二巻
梵字胎藏曼陀羅諸尊梵名一巻
梵字金剛頂蓮花部大儀軌二巻
梵字毘盧遮那三摩地儀軌一巻
梵字普賢行願讃一巻
梵字大佛頂眞言一巻
梵字大隨求眞言一巻
梵字少隨求眞言一巻
梵字大寶樓閣經眞言一巻
梵字金剛藏降三世讃王一巻
梵字千臂甘露軍荼利眞言一巻
梵字吉慶讃一巻

梵字無垢淨光陀羅尼一卷
梵字菩提場莊嚴陀羅尼一卷
梵字寶部金剛讚一卷（就中、如意輪讚、大悲眞言、維摩詰眞言）
梵字妙法蓮華經儀軌一卷
梵字不動尊儀軌一卷
梵字尊勝佛頂眞言一卷
梵字七俱胝佛母讚一卷
梵字馬頭觀音陀羅尼一卷
梵字千鉢文一百八名殊讚一卷
梵字一切吉祥天女陀羅尼一卷
梵字不空羂索陀羅尼一卷
梵字千手千眼眞言一卷
梵字阿彌陀佛眞言一卷
梵字寶篋眞言一卷
梵字十六大菩薩讚一卷
梵字十六大菩薩眞言一卷
梵字大三昧耶眞實一百八名讚一卷
梵字七俱胝儀軌一卷
梵字葉衣觀音眞言一卷
梵字大悲心眞言一卷
梵字一字頂輪王儀軌一卷
梵字文五字眞言殊儀軌一卷
梵字烏芻濕摩儀軌一卷
梵字勝初瑜伽儀軌一卷

梵字天龍八部讃一卷
梵字法身偈一卷
梵字十一面讃一卷
梵字金剛峯樓閣眞言并一百八名讃一卷
梵字蓮花部讃一卷
梵字悉曇章一卷
右四十二部四十四卷。
釋教者也本乎印度。西域東垂風範天隔。言語異楚夏之韻。文字非篆隷之體。是故待彼翻譯乃酌清風。然猶眞言幽邃字字義深。隨音改義賒切易謬。粗得髣髴不得清切。不是梵字長短難別。存源之意其在茲乎

【書き下し】
梵字
梵字大毘盧舍那胎藏大儀軌二卷
梵字胎藏曼陀羅諸尊梵名一卷
梵字金剛頂蓮花部大儀軌二卷
梵字毘盧遮那三摩地儀軌一卷
梵字普賢行願讃一卷
梵字大佛頂眞言一卷
梵字大隨求眞言一卷
梵字少隨求眞言一卷
梵字大寶樓閣經眞言一卷
梵字金剛藏降三世讃王一卷
梵字千臂（せんぴ）甘露軍（ぐんだり）茶利眞言一卷

梵字吉慶讃一巻
梵字無垢淨光陀羅尼一巻
梵字菩提場莊嚴陀羅尼一巻
梵字寶部金剛讃一巻（就中、如意輪讃、大悲眞言、維摩詰眞言）
梵字妙法蓮華經儀軌一巻
梵字不動尊儀軌一巻
梵字尊勝佛頂眞言一巻
梵字七俱胝（しちくてい）佛母讃一巻
梵字馬頭觀音陀羅尼一巻
梵字千鉢（せんはつ）文殊一百八名讃一巻
梵字一切吉祥天女陀羅尼一巻
梵字不空羂索陀羅尼一巻
梵字千手千眼眞言一巻
梵字阿彌陀佛眞言一巻
梵字寶篋眞言一巻
梵字十六大菩薩讃一巻
梵字十六大菩薩眞言一巻
梵字大三昧耶眞實一百八名讃一巻
梵字七俱胝儀軌一巻
梵字葉衣（ようえ）觀音眞言一巻
梵字大悲心眞言一巻

梵字一字頂輪王儀軌一巻
梵字文殊五字眞言儀軌一巻
梵字烏芻濕摩儀軌一巻
梵字勝初瑜伽儀軌一巻
梵字天龍八部讃一巻
梵字法身偈一巻
梵字十一面讃一巻
梵字金剛峯樓閣眞言并一百八名讃一巻
梵字蓮花部讃一巻
梵字悉曇章一巻

右、四十二部四十四巻。

釋教は印度を本とす。西域・東垂、風範は天に隔てり。言語は楚夏の韻を異にし、文字は篆隷の體に非ず。是の故に彼の翻譯を待ち乃し清風を酌む。然も猶、眞言は幽邃にして字字は義深し。音に隨って義を改め、睇切は謬り易し。粗髣髴を得るも、清切なるを得ず。是の梵字にあらずんば長短別ち難し。源に存するの意其れ茲に在り。

【私訳】

梵字、すなわちサンスクリット表記を含む儀軌・陀羅尼・真言・讃・章などは以下の通りです。
リストは略。
釈迦の教え、すなわち仏教はインドを本源としています。西域・中国はその教風と規範がインドと大きく隔たっています。

言語は中国の音韻と異なり、文字は篆隷など五体書法ではありません。その故に、あの漢訳を待って今はその教風を汲み取っています。その上に真言は奥深く、字は字で意味が深遠です。（字の格変化の）読み方に従い意味が変り、音の緩急（短音・長音）はまちがいやすいものです。ほぼありありと音が想像できても、厳密さを得ることができません。この梵字によらなければ音の長短を別けることは至難で、（真言が奥深く）本源にある意味はここにあります。

【註記】

①東垂：東の果て。中国のこと。
②風範：模範となる風采、手本の形。教風と規範。
③楚夏：楚は中国春秋時代の楚、夏は中国の古名。中国のこと。
④篆隷：書法の篆書と隷書。
⑤幽邃：奥深く静かなこと。
⑥賒切：緩やかと切迫、緩と急。
⑦髣髴：ありありと想像する。
⑧清切：厳密さ。

【原文】

論疏章等

華厳經疏一部卅卷澄觀法師撰
法華玄義一部十卷天台智者撰
法華文句疏二部二十卷天台智者撰
四教義一部十二卷天台智者撰
法華記一部十卷天台湛然法師記
法華賛一部四卷清索法師述
大毘盧遮那經疏一部二十卷一行禪師撰

虛空藏經疏一部四卷潛眞法師撰
文殊師利經疏一部三卷潛眞法師撰
仁王經疏一部三卷良賁法師撰
明四種具足人求善知識法一卷
金剛般若道俗記三卷
辯正理論一部八卷法琳師撰
三教不齊論一卷
辯凡聖因果界地章二卷良賁法師撰
金剛般若經疏一部三卷道氤法師撰
貞元新定釋目錄卅卷圓照律師撰
貞元新翻譯經圖記二卷圓照律師撰
佛頂尊勝陀羅尼傳序一卷
華嚴十會一卷
大方廣佛華嚴經品會名圖一卷
華嚴會請賢聖文一卷
金師子章并緣起六相一卷
杜順禪師會諸宗別見頌一卷
授五戒八戒文一卷
悉曇字記一卷
悉曇釋一卷
無畏三藏禪要一卷
建立壇法一卷
金剛頂瑜伽祕密心地法門義訣一卷
大唐大興善寺大辯正大廣智三藏表答碑六卷

右三十二部一百七十卷。

含理者也三爻。能敷者也十翼。若闕彖繫龜文何益。況乃一乘理奥義與文乖。不假論疏。微言無功。雖有勞載車。冀裨乎聖典。

【書き下し】

論・疏・章等

華嚴經疏一部卅卷、澄觀法師撰

法華玄義一部十卷、天台智者撰

法華文句疏二部二十卷、天台智者撰

四教義一部十二卷、天台智者撰

法華記一部十卷、天台湛然法師記

法華賛一部四卷、清索法師述

大毘盧遮那經疏一部二十卷、一行禪師撰

虛空藏經疏一部四卷、潛眞法師撰

文殊師利經疏一部三卷、潛眞法師撰

仁王經疏一部三卷、良賁法師撰

明四種具足人求善知識法一卷

金剛般若道俗記三卷

辯正理論一部八卷、法琳師撰

三教不齊論一卷

辯凡聖因果界地章二卷、良賁法師撰

金剛般若經疏一部三卷、道氤法師撰

貞元新定釋目録卅卷、圓照律師撰

貞元新翻譯經圖記二卷、圓照律師撰

佛頂尊勝陀羅尼傳序一卷

華嚴十會一卷

大方廣佛華嚴經品會名圖一卷

華嚴會請賢聖文一卷

金師子章并縁起六相一卷

杜順禪師會諸宗別見頌一卷

授五戒八戒文一卷

悉曇字記一卷

悉曇釋一巻
無畏三藏禪要一巻
建立壇法一巻
金剛頂瑜伽祕密心地法門義訣一巻
大唐大興善寺大辯正大廣智三藏表答碑六巻
右、三十二部一百七十巻

理を含む者は三爻、能く敷く者は十翼なり。若し彖繫を闕けば龜文何の益かある。況んや乃ち一乘は理奥くして義は文と乖り。論疏を假らざれば微言は功無し。載車に勞すること有りと雖も、冀は聖典を裨ん。

【私訳】

論・疏・章などは、次の『華嚴經疏』『法華玄義』『四教義』『大毘盧遮那經疏』（『大日経疏』）『悉曇字記』『大唐大興善寺大辯正大廣智三藏表答碑』などの三十二部一百七十巻です。

リスト略

天の運行の道理を含むのは（三爻の）八卦であり、それをよく補翼するものが『易経』の解説書の『十翼』であります。もし『十翼』のうち彖伝や繫辞伝が欠ければ、夏の時代洛水から現れた神亀の背の文様の意味がわからず、何の足しにもなりません。ましてや、一乘（密教）は教理が深く、その意味は文面とは一致しませんので、論や疏を借りなければ（本文の）微妙な言葉は役に立ちません。（論・疏を）車に乘せて運ぶ労力が必要な時があるかもしれませんが、密教聖典の正しい理解を補うためであることを願ってのことであります。

【註記】

①三爻：爻は易の卦の組み合わせの横画。三爻で八卦。
②十翼：『易経』の本文を補う解説書。彖伝（上下）・象伝（上下）・繫辞伝（上下）・文言伝・説卦伝・序卦伝・雑卦伝という十篇からなる。
③彖繫：『十翼』の彖伝と繫辞伝。
④龜文：中国、夏王朝の時代、初代禹王が洪水を止めた際、洛水から出て来た神亀の背にあった九つの文様。
⑤論疏：仏教の論書と註釈書。
⑥微言：微妙な言葉・表現。

【原文】

佛像等

大毘盧遮那大悲胎藏大曼荼羅一鋪七幅一丈六尺
大悲胎藏法曼荼羅一鋪
大悲胎藏三昧耶略曼荼羅一鋪三幅
金剛界九會曼荼羅一鋪七幅一丈六尺
金剛界八十一尊大曼荼羅一鋪三幅
金剛智阿闍梨影一鋪三幅
善無畏三藏影一鋪三幅
大廣智阿闍梨影一鋪三幅
青龍寺惠果阿闍梨影一卷三幅、親しく阿闍梨耶の付法
一行禪師影一鋪三幅
右佛菩薩金剛諸天等像并傳法阿闍梨等影十鋪

法本無言。非言不顯。眞如絶色。待色乃悟。雖迷月指。提撕無極。不貴驚目之奇觀。誠乃鎭國利人之寶也。加以密藏深玄。翰墨難載。更假圖畫開示不悟。種種威儀種種印契。出自大悲一覩成佛。經疏祕略載之圖像。密藏之要實繫乎茲。傳法受法棄此而誰矣。海會根源斯乃當之也。

【書き出し】

佛像等

大毘盧遮那大悲胎藏大曼荼羅一鋪七幅一丈六尺

大悲胎藏法曼荼羅一鋪

大悲胎藏三昧耶略曼荼羅一鋪三幅

金剛界九會曼荼羅一鋪七幅一丈六尺

金剛界八十一尊大曼荼羅一鋪三幅

金剛智阿闍梨影一鋪三幅

善無畏三藏影一鋪三幅

大廣智阿闍梨影一鋪三幅

青龍寺惠果阿闍梨影一卷三幅、親しく阿闍梨耶に付法されたり

一行禪師影一鋪三幅

右、佛・菩薩・金剛・諸天等像、并せて傳法の阿闍梨等の影十鋪。

法は本言無くも言に非ざれば顯われず。眞如は色を絶つも色を待って乃ち悟る。月指に迷うと雖も提撕は極まり無し。目を驚かすの奇觀を貴ばず、誠は乃ち國を鎮め人を利する之れ寶なり。加以密藏は深玄にして翰墨に載せ難し。更に圖畫を假りて悟らざるに開示す。種種の威儀種種の印契は大悲自り出て一覩に成佛す。經疏は祕略にして之を圖像に載せたり。密藏の要は實に茲に繫る。傳法受法此れを棄てて誰かある。海會の根源斯れ乃ち之に當る。

【私訳】

以下は、『大毘盧遮那大悲胎藏大曼荼羅』『金剛界九會曼荼羅』『青龍寺惠果阿闍梨影』などの仏像や曼荼羅や御影などであります。

リスト略。

「一切空」の真実世界はもともと言亡慮絶ですが、言語でなければ真実世界は現象しない。サトリ（真如）の世界は事物事象を絶っているが、事物事象があってはじめて悟れるのである。教理を理解しないで仏典の文字読みに気をとられるとしても、師の教導は極まることがありません。ひとの目を驚かす珍しい見方を貴ばず、ほんとうは鎮護国家・済世利人こそが宝であります。加えて、密教は奥深く筆や墨で文字・文章にすることができません。だからサトリに至らない人には図絵を借りて開示するのです。（尊像の）いろいろな姿・形も印契も大慈悲から出ていて、それを一目見れば成仏します。経典や註釈は秘し略しますが、図像にそれが具現されています。密教の要諦は実にここにかかっていて、伝法も受法もこれを捨てて誰があるでしょう。金胎両部曼陀羅海会の根源はこれに当るのであります。

【註記】

①月指：月を指さしても月を見ないで指を見ること。『楞厳経』にある、教理を理解しないで仏典の文字読みに気をとられている喩え。

②提撕：師が弟子を奮起させて教え導くこと。

③一覩：一目よく見ること。

【原文】

道具

五寶五鈷金剛杵一口

五寶五鈷鈴一口

五寶三昧耶杵一口

五寶獨鈷金剛一口

五寶羯磨金剛四口
五寶輪一口
已上各々著佛舍利。
五寶金剛橛四口
金銅盤子一口
金花銀閼伽盞四口
右九種一十八事。

智之無邊號佛陀。覺之無上名調御。智無邊故無所不知。覺無上故方便難測。故能種種法門攝化長夜。所謂金剛等者竝皆佛之智法之門。受持頂戴福利無極。外摧滅魔軍內以調伏煩惱。觀智之端自茲而起。疑南之子不可不知。

【書き下し】

道具

五寶の五鈷金剛杵一口
五寶の五鈷鈴一口
五寶の三昧耶杵一口
五寶の獨鈷金剛一口
五寶の羯磨金剛四口
五寶の輪一口
已上、各々佛舍利を著す。
五寶の金剛橛(けつ)四口
金銅盤子(ばんす)一口

金花銀閼伽盞(あかさん)四口

右、九種一十八事。

智の無邊なるを佛陀と號し、覺の無上なるを調御(じょうご)と名づく。智は無邊なるが故に知らざる所なく、覺は無上なるが故に方便測り難し。故に能く種種の法門は長夜(じょうや)を攝化す。所謂(いわゆる)金剛等は竝びに皆佛の智法の門なり。受持し頂戴すれば福利極まり無し。外に魔軍を摧滅し内に以て煩惱を調伏す。觀智の端は茲(ここ)自りして起り、疑南(ぎなん)の子は知らずんばある可からず。

【私訳】

道具（仏具・仏器）は、五宝の五鈷金剛杵、五宝の五鈷鈴、五宝の三昧耶杵（三鈷杵？）、五宝の獨鈷金剛、五宝の羯磨金剛、五宝の輪（以上には、各々仏舎利が添えられています）、五宝の金剛橛、金銅の盤子（金剛盤）、金花銀の閼伽盞（閼伽器）など、九種類、十八個であります。

真実智が広大無辺なことを仏陀と呼び、サトリがこの上ない者（無上正等覚者）を如来と称します。真実智は無辺であるが故に知らない所がなく、サトリがこの上ないが故に衆生済度の方法もはかり知ることが至難です。ですので、いろいろな教えの法門によって煩悩の迷いの世界をさまよう衆生を教化し救済するのです。いわゆる金剛杵などの仏具・仏器は、それぞれ皆仏智の法門であります。これを受持し大事に頂き使用すれば、福徳の利益は極まりなしであります。私の外では煩悩の降魔の勢いをくだいて消滅させ、私の内では煩悩を消除します。真実智を観じる端緒はここから起きます、煩悩にさまよう人は、よくよく知るべきであります。。

【註記】

①調御：調御丈夫。如来のこと。

②長夜：煩悩によって生死をさまよう迷いの世界。

③攝化：衆生を教化し救済すること。
④金剛等：金剛杵や金剛橛などの仏具・仏器。
⑤魔軍：煩悩の降魔の勢い。
⑥疑南：南を疑う。ここは煩悩にさまよう世界。

【原文】

阿闍梨付囑物

佛舍利八十粒、就中金色舍利一粒
刻白檀佛菩薩金剛等像一龕
白紲大曼荼羅尊四百四十七尊
白紲金剛界三昧耶曼荼羅尊一百二十尊
五寶三昧耶金剛一口
金銅鉢子一具二口
牙床子一口
白螺貝一口

右八種物等、

本是金剛智阿闍梨從南天竺國持來。轉付大廣智阿闍梨。廣智三藏又轉與青龍阿闍梨。青龍和尚又轉賜空海斯乃傳法之印信萬生之歸依者也

【書き下し】

阿闍梨の付囑物

佛舍利八十粒、就中、金色舍利一粒
白檀を刻す佛・菩薩・金剛等の像一龕（がん）

白紲(はくせつ)の大曼荼羅尊四百四十七尊
白紲の金剛界三昧耶曼荼羅尊一百二十尊
五寶の三昧耶金剛一口
金銅の鉢子(はつす)一具二口
牙床子(がしょうじ)一口
白の螺貝(らがい)一口
右の八種の物等は、
本(もと)は是れ金剛智阿闍梨が南天竺國従り持ち來り、大廣智（不空）阿闍梨に轉付す。廣智三藏は又、青龍（恵果）阿闍梨に轉與す。青龍和尚又、空海に轉賜す。斯れ乃ち傳法の印信(いんじん)、萬生の歸依する者なり。

【私訳】
金剛智三蔵以降の伝法印信の付嘱物は、仏舎利八十粒（この内、金色の舎利一粒）、白檀を刻す佛菩薩金剛等の像一龕、白紲の大曼荼羅尊四百四十七尊、白紲の金剛界三昧耶曼荼羅尊一百二十尊、五寶の三昧耶金剛一口、金銅の鉢子一具二口、牙床子一口、白の螺貝一口
右の八種の物は、その本をたどれば金剛智三蔵が南インドからもたらし、大廣智不空三蔵に付嘱したものでありま。不空三蔵はまた、青龍寺の恵果和尚に付嘱しました。そして恵果和尚は空海に賜わりました。これは伝法の証明であり、すべての衆生の帰依するところであります。

【註記】

①付囑物：師僧が伝法の弟子に付託する法具など、
②龕：仏像を彫刻あるいは納めた小さな厨子。
③白紲：白の太めの糸で編んだ布。
④牙床子：装飾のついた台座。
⑤螺貝：法螺貝。
⑥印信：伝法の証明（の付法状）。
⑦萬生：あらゆる衆生。

【原文】

健陀穀子袈裟一領
碧瑠璃供養鋺二口
虎珀供養鋺一口
白瑠璃供養椀一口
紺瑠璃箸一具
右五種。
亦是青龍阿闍梨之所付也。

空海去延暦二十三年季夏之月。隨入唐大使藤原朝臣。同上第一船發赴咸陽。其年八月到福州著岸。十二月下旬到長安城。宣陽坊宮宅安置。二十四年仲春十一日。大使等旋軔本朝。唯空海孑然准勅留住西明寺永忠和尚故院。於是歴城中訪名徳。偶然奉遇青龍寺東塔院和尚法諱惠果阿闍梨。其大徳則大興善寺大廣智三藏之付法弟子也。徳惟時尊道則帝師。三朝尊之受灌頂。四衆仰之學密藏。空海與西明寺志明談勝法師等五六人。同往見和尚。和向乍見含笑。喜歡告曰。我先知汝來。相待久矣。今日相見大好大好。報命欲竭。無人付法。必須速辨香花入灌頂壇。即歸本院營辨供具。六月上旬入學法灌頂壇。是日臨大悲胎藏大曼陀羅。依法抛花。偶然著中台毘盧遮那如來身上。阿闍梨讃曰。不可思議不可思議。再三讃歎。即沐五部

灌頂。受三密加持。從此以後。受胎藏之梵字儀軌。學諸尊之瑜伽觀智。七月上旬更臨金剛界大曼荼羅。重受五部灌頂。亦拋花得毘盧遮那。和尚驚歎如前。八月上旬亦受傳法阿闍梨位之灌頂。是日設五百僧齋普供四衆。青龍大興善寺供奉大德等。竝臨齋筵悉皆隨喜。金剛頂瑜伽五部眞言密契相續而受。梵字梵讃間以學之。和尚告曰。眞言祕藏經疏 隱密。不假圖畫不能相傳。則喚供奉丹青李眞等十餘人。圖繪胎藏金剛界等大曼陀羅等一十鋪。僉集二十餘經生。書寫金剛頂等最上乘密藏經。喚又供奉鑄博士楊忠信趙呉。新造道具一十五事。圖像寫經漸有次第。和尚告曰。吾昔髫齔之時。初見三藏。三藏一目之後。偏憐如子。入内歸寺如影不離。竊告之曰。汝有密藏之器。努力努力。兩部大法祕密印契因是學得矣。自餘弟子若道若俗。或學一部大法。或得一尊一契。不得兼貫。欲報岳瀆昊天罔極。如今此土縁盡不能久住。宜此兩部大曼荼羅。一百餘部金剛乘法。及三藏轉付之物。竝供養具等。請歸本郷流轉海内。纔見汝來恐命不足。今則授法有在。經像功畢。早歸郷國以奉國家。流布天下增蒼生福。然則四海泰萬人樂。是則報佛恩報師德。爲國忠也。於家孝也。義明供奉此處而傳。汝其行矣傳之東國。努力努力。付法殷懃。遺誨亦畢。去年十二月望日。蘭湯洗垢。結毘盧遮那法印。右脇而終。是夜於道場持念。和尚宛然立前告曰。我與汝久有契約。誓弘密藏。我生東國必爲弟子。委曲之言更不煩述。阿闍梨付囑受法之由大體如是。

【書き下し】

健陀穀子袈裟（けんだこくしけさ）一領

碧瑠璃供養鋺（へきるりくようえん）二口

虎珀供養鋺一口

白瑠璃供養椀一口

紺瑠璃箸（はし）一具

右五種、

亦た是れ青龍阿闍梨の付する所なり。

空海、去んじ延暦二十三年季夏の月、入唐の大使藤原朝臣に隨って同じく第一船に上り咸陽(かんよう)に發赴(はっぷ)す。其の年八月、福州に到り著岸す。十二月下旬、長安城に到り宣陽坊の官宅に安置す。二十四年仲春十一日、大使等 軔(はじめ) を本朝に旋(めぐら)す。唯だ空海、孑然(けつぜん)として勅に准じて西明寺の永忠和尚の故院に留住す。是に於いて、城中を歴(へ)て名徳を訪ぬるに偶然として青龍寺東塔院の和尚、法の諱(いみな)は惠果阿闍梨に遇い奉る。其の大徳は則ち大興善寺の大廣智三藏の付法の弟子なり。徳は惟れ時に尊く道は則ち帝の師なり。三朝之を尊び灌頂を受け四衆之を仰ぎ密藏を學ぶ。空海、西明寺の志明・談勝法師等五六人と與に同じく往いて和尚に見ゆ。和尚 乍(たちまち) に見て笑を含み喜歡して告げて曰く。「我れ先に汝が來ることを知りぬ。相待つこと久し。今日相見ゆる、大いに好し大いに好し。報命竭きなんと欲するに付法に人無し。必ず須く速に香花を辨じ灌頂壇に入るべし」と。即ち本院に歸り供具を營辨し、六月上旬學法灌頂壇に入る。是の日、大悲胎藏大曼陀羅に臨み、法に依って花を拋(なげう)つに偶然として中台の毘盧遮那如來の身上に著す。阿闍梨讃じて曰く。「不可思議なり、不可思議なり」と。再三讃歎す。即ち五部灌頂に沐し三密加持を受く。此れ從り以後、胎藏の梵字儀軌を受け諸尊の瑜伽觀智を學ぶ。七月上旬、更に金剛界大曼荼羅に臨み重ねて受五部灌頂を受く。亦た花を拋つに毘盧遮那を得。和尚の驚歎すること前の如し。八月上旬、亦た傳法阿闍梨位の灌頂を受く。是の日、五百の僧の齋(さい)を設け普く四衆に供ず。青龍・大興善寺の供奉(ぐぶ)大徳等、竝びに齋筵に臨み悉く皆隨喜す。金剛頂瑜伽、五部眞言、密契、相續いて受け梵字・梵讃は間を以て之を學ぶ。和尚告げて曰く。「眞言祕藏は經疏に隱密なり。圖畫を假りずして相傳すること能わず」と。則ち供奉の丹青(たんせい)李眞等十餘人を喚び、胎藏・金剛界等大曼陀羅等一十鋪を圖繪し、僉(ことごと)く二十餘の經生(きょうせい)を集め金剛頂等の最上乘の密藏經を書寫す。又、供奉の

鑄博士楊忠信（趙呉）を喚び、新たに道具一十五事を造る。像を圖し經を寫すこと漸く次第有り。和尚の告げて曰く。「吾、昔髻亂（ちょうしん）之時、初めて（不空）三藏に見ゆ。三藏一目の後偏えに憐れむこと子の如くす。内に入り寺に歸るに影の如く離れず。竊かに之を告げて曰く。《汝、密藏の器有り。努力（つとめ）よ、努力よ》と。兩部の大法、祕密の印契、是に因って學び得たり。自餘の弟子、若しくは道、若しくは俗、或いは一部大法を學び、或いは一尊一契を得るとも、兼貫（けんかん）することを得ず。岳瀆（がくとく）を報ぜんと欲するに、昊天（こうてん）極まりなし。今、此の土に緣盡きて久住すること能わず。宜しく此の兩部大曼荼羅、一百餘部の金剛乘法、及び三藏轉付の物、竝びに供養の具等、請う本鄕に歸り海内に流轉すべし。纔かに汝の來たるを見て命の足らざるを恐る。今則ち法の在りとし有るを授く。經像の功畢んぬ。早く鄕國に歸り以て國家に奉じ、天下に流布して蒼生の福を增せ。然れば則ち四海は泰く萬人樂しまん。是れ則ち佛恩に報じ師の徳に報じ、國の爲に忠なり、家に於いて孝なり。義明供奉は此の處にて傳えよ。汝は其れ行け、之を東國に傳えよ。努力よ、努力よ」と。付法は殷懃なり。遺誨亦た畢んぬ。去し年十二月望日、蘭湯（いに）に垢を洗い、毘盧遮那の法印を結んで、右を脇に終んぬ。是の夜、道場に於いて持念するに、和尚宛然（えんぜん）として前に立ち告げて曰く。「我と汝と久しく契約有り。誓って密藏を弘む。我東國に生れ必ず弟子と爲らん」と。委曲の言更に煩わしく述べず。阿闍梨の付囑、受法の由、大體是くの如し。

【私訳】

恵果和尚からの伝法の付嘱物は、健陀穀子の袈裟一領、碧瑠璃の供養鋺二口、虎珀の供養鋺一口、白瑠璃供養椀一口、紺瑠璃箸一具の五種であります。

空海は、去る延暦二十三年五月、入唐大使の藤原朝臣（葛野麻呂）に随行して、遣唐使船団の同じ第一船に上船し、長安

に向って出発しました。その年の八月、福州の馬尾港に到着しました。十二月の下旬長安城に着き、宣陽坊の官宅に落ち着きました。翌延暦二十四年二月十一日、大使などの使節団は日本に向けて帰路につきました。空海はただ一人、勅命によって大安寺の永忠和尚が在唐二十年を過した西明寺の部屋に止住することになりました。それから、長安の城中を歩いては名のある大徳を訪ねていると、偶然、青龍寺東塔院の恵果和尚にお遇いすることができました。その大徳は、大興善寺の大広智不空三蔵の付法の弟子で、徳はこの時代に尊く、道は帝王の師でした。代宗・徳宗・順宗の三代皇帝は和尚を尊び灌頂を受け、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷は和尚を讃仰し密教を学んでいます。空海は西明寺の志明・談勝法師ら五～六人と和尚のところに行きお会いしたところ、和尚はすぐに私を見て微笑し、喜んで言われました。「私はすでにあなたがここに来ることを知っていました。長く待ちましたが、今日こうしてお会いできました。大いにけっこうなことです。私はもう寿命が尽きようとしているのに、まだ私の密法をすべて託すに足る人がいません。あなたにすべてを託すべく、すみやかに香花を弁じてかならず潅頂の壇に入れてあげましょう」と。すぐに西明寺に帰り潅頂に必要な法具類を用意し、六月上旬には学法潅頂の壇に入ることができました。この日、大悲胎蔵大曼陀羅に臨み、軌則によって花（樒）を敷曼荼羅の上に放つと、偶然中台八葉院の大日如來の身上に落ちました。和尚が讃歎して言いました。「不可思議だ、不可思議だ」と。再三讃歎していました。次に胎蔵界の五部灌頂を受法し、三密加持の伝授を受けました。これより後、胎蔵界の梵字真言のある儀軌を伝授され、諸尊の瑜伽念誦法を學びました。さらに、七月上旬、金剛界大曼荼羅に臨んで潅頂を受け、重ねて（金剛界の）五部灌頂を受けました。また樒の花を放つと大日如来と結縁を得ました。和尚は前と同じように驚歎していました。八月上旬にはまた伝法阿闍梨位の潅頂を受法しました。この日は、五百の僧にお齋の食事を用意し、広く比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷にも供しました。青龍寺・大興善寺の供奉大徳ら並んでお齋の席に着き全員が隨喜していました。その後、金剛界の瑜伽念誦法・五部の真言・密印を相次いで受法し、梵字・梵讃は間を見て学びました。和尚が云いました。「真言という秘蔵は経典や註釈書には秘せられていて、図画を借りずには伝えることが容易ではありません」と。そこで、宮中に供奉する絵師の李眞等十余人を呼び出し、胎蔵・金剛界などの大曼陀羅ほか十鋪を描かせ、全部で二十人余の写経生を集め、金剛頂経などの最上級の密教経典を書写させました。さらに、宮中に出仕する鋳物博士の楊忠信（趙呉）を呼び、新たに道具十五個を造らせました。像を描き経典を写すことも漸く順次進みました。和尚が言いました。「私が昔まだ髪を垂らし歯が抜け替る頃、はじめて不空三蔵にお目にかかりました。三蔵は私を一目見て、わが子のように一生懸命可愛がってくれました。参内する時も自分の寺に帰る時も影のように離れませんでした。竊かに私にこう言い

ました。《お前には密教の器量がある。努力しなさい、努力しなさい》と。金胎両部の大法や祕印は、こうして学受することができました。私以外の弟子、または出家、または在家、あるいは一部の大法を学び、あるいは一尊一印を得た人でも、金胎両部を兼ね貫くことはできません。五岳より高く四大河よりも深い師の恩に報いたいのですが、広い空は極まりありません。今、この世に縁が尽きて長く住することができません。この両部の大曼荼羅や百余部の金剛乗の法、及び金剛智三蔵から転じて付嘱されてきた物、並びに供養の仏具など、よろしく本国に持ち帰り国内に流布するよう願っております。わずかにお前が来るのを見て、寿命が足りないことを恐れていましたが、今すべての密法を授けました。経典の転写や仏像の造顕も終りました。早く本国に帰って国家に奉仕し、この密法を天下に流布して人々の福徳を増進しなさい。そうすれば国中が泰平で万人が楽しむでしょう。これが仏の恩に報じ、師の徳に報じ、国のためには忠であり、家においては孝であります。義明供奉はこの青龍寺で法を伝えなさい。お前はさあ行きなさい、この密法を東国に伝えなさい。努力しなさい、努力しなさい」と。付法は殷懃に行われました。遺誨もまた終りました。去る年の十二月十五日、蘭の香り芳しい湯で身の垢れを洗い、大日如来の法印を結び、右脇にして臨終となられました。この夜、道場においてご冥福を念じていますと、恵果和尚が生前さながらに前に立ち言いました。「私とお前には長い契りがあります。誓って密教を弘めることです。私は東国に生れ替ってかならずお前の弟子になろう」と。詳しくはこれ以上煩わしく述べません。恵果和尚からの付嘱や受法の由は、だいたいこのようなものです。

【註記】

①健陀穀子袈裟：乾陀樹（ワサビノキ）の実の煮汁で染めた茶色の袈裟。
②碧瑠璃：青い瑠璃。
③白瑠璃：白い瑠璃。
④紺瑠璃：紺の瑠璃。
⑤咸陽：ここは長安の意。
⑥發赴：出発。
⑦軔：歯止め。車止め。
⑧孑然：一人で。

⑨法の諱：出家名。
⑩三朝：代宗・徳宗・順宗。
⑪志明・談勝法師：西明寺でお世話になった法友。
⑫營辨：用意する。
⑬中台：中台八葉院。
⑭五部灌頂：潅頂の儀式中、大日如来等の五仏・五智を表す五瓶の香水を受者の頭上に注ぐ作法。ここは胎蔵界五部（仏部（大日）・金剛部（宝幢）・宝部（開敷華王）・蓮華部（無量寿）・羯磨部（天鼓雷音））の潅頂を言う。
⑪三密加持：如来と行者の身・口・意の三密が一体的に相応すること。
⑫齋：斎食を集った僧に供する法会。
⑬供奉大徳：宮中に出仕する内供奉の高僧たち。
⑭金剛頂瑜伽：金剛界の瑜伽念誦法。
⑮五部眞言：金剛界五仏の真言。
⑯密契：密印、印契。
⑰梵字・梵讃：サンスクリット表記・サンスクリット発音の讃頌。
⑱丹青：絵師。
⑲經生：写経生。
⑳髫齔：垂れ髪、歯が抜け替ること。少年期。
㉑兼貫：金胎両部を兼ね貫くこと。
㉒岳瀆：岳は五岳、瀆は四瀆（四大河）。師の恩の五岳より高く四大河よりも深い、の意。
㉓昊天：広い空、大空。
㉔義明供奉：恵果和尚が金胎両部の潅頂を授けた伝法の一番弟子の義明。
㉕蘭湯：蘭の香り芳しい湯。
㉖宛然：そのまま、さながらに。

【原文】

梵夾三口

右般若三藏告曰。

吾生縁罽賓國也。少年入道經歴五天。常誓傳燈來遊此間。今欲乗桴東海無縁志願不遂。我所譯新華嚴六波羅蜜經及斯梵夾將去供養。伏願結縁彼國拔濟元元。恐繁不一二。

【書き下し】

梵夾（ぼんきょう）三口

右、般若三藏告げて曰く。

吾が生縁は罽賓國（けいびんこく）なり。少年にして道に入り五天を經歴す。常に傳燈を誓い此の間に來遊す。今桴（いかだ）に乗らんと欲して東海に縁無し、志願は遂げず。我が譯す所の新華嚴、六波羅蜜經、及び斯の梵夾、將ち去りて供養せよ。伏して願わくは縁を彼の國に結び元元を拔濟せよ。繁を恐れ一二にせず。

【私訳】

サンスクリット原典は三口です。般若三藏が私に言いました。「私はインドのカシミール地方（あるいはガンダーラ地方）に生れました。少年の頃に出家して仏道に入りインド国中を遍歴しました。いつも法灯を伝えようと心に期し、機会を得てこの国に来ました。今、船に乗って日本に行きたいと思っているのですが、縁がなくて志を遂げることができません。私が訳した新しい『四十華厳』や『大乗理趣六波羅蜜多経』、またこのサンスクリット原典を持ち帰って供養されよ。どうか、この経典が日本との縁となり、人々を苦から拔濟してください。お別れに際してあなたに言いたいことが山ほどあり、それを箇条書きのようにして言えば煩わしくなるので、一、二、などと言わないことにしました。

【註記】

①梵夾：貝多羅葉に経文を刻書し、ヒモで閉じて冊子にしたサンスクリット原典。
②罽賓國：北インドのカシミール地方、あるいはガンダーラ地方にあったとされる国。
③五天：五天竺。インドの東西南北及び中央、すなわち全インド。
④桴：いかだ。
⑤東海：日本の意。
⑥新華厳：『四十華厳』（「入法界品」のみの部分訳）。
⑦六波羅蜜經：大乗理趣六波羅蜜多経。
⑧元元：万民。

【付記】

十二月二十一日、延暦二十三年もまもなく暮れようという年の暮、空海の一行は長安の入口ともいうべき長楽坂を下り、やっと長楽駅に着いた。京を出発してから幾日を要したであろうか。難波ノ津を発ってからとっくに半年が過ぎていた。

十二月廿一日、郡の長楽駅に到上し宿す。
廿三日、内使趙忠、飛龍の家の細馬廿三匹を将ひて迎へ来たる。
兼ねて酒脯を持し宜しく慰す。駕して即ち京城に入る。（『日本後紀』）

大使に給するに七珍鞍を以てし、次使等に粧鞍を給す。
十二月二十三日、都長安城に到上す。
京華に入るの儀、記し尽すべからず。見る者遐邇に満てり。（『高野大師御廣傳』）

一行はここで二日間休息した。勅使一行に厚く礼を述べ、お互いに長旅の労をねぎらったであろう。空海もさすがに心の高揚を抑えられなかったにちがいない。二日はまたたく間に過ぎ、十二月二十三日、内使の趙忠が用意した駿馬二十三頭に一人ひとり跨り列を正して長安城に入った。

一行はまもなく、宣陽坊（左街「東市」の西側）にある外国人用の宿舎に入った。鴻臚寺（館）ではなく使院（公館）であった。鴻臚寺（館）は同じ時期に朝貢にきていた吐蕃と南詔（雲南地方の吐蕃の友好国）の一行で満室のようであった。大使藤原葛野麻呂ほか随員はにわかに忙しくなった。この年新年早々の徳宗の薨去に対し、二十八日には宮城の正面中央の「承天門」で儀仗を立てて国家としての弔意を表した。その日、順宗（第十代）が即位したが、父帝の喪中のために城中はいたって静かであった。

明けて延暦二十四年（大同元年）正月、大使らは国使としての新年の朝賀を無事に終え、長安滞在わずか三十日にして、二月十一日帰途につく。

使院（公館）に入った空海は、大使らの新年朝賀の任が終ると待ちかねたように城内に出かけた。世界レベルの国際都市らしく行き交う人も多く活気に満ちていた。空海は先ず、寄宿先となる西明寺をたずねた。西明寺は延康坊（右街「西市」の東南区坊）の西南の隅にあった。使院のある宣陽坊からは「朱雀大街」をはさみほぼまっすぐ西である。近年、ＮＨＫ取材班が往古の西明寺の故地を現地の役場や史料館の古い地図によって調査をしたところ、当時の延康坊が今の西安市の（「朱雀大街」にある「西安市国税局」を目印にしてその西方の「西安市紅纓路派出所」がある）「紅纓路」周辺の一帯であると推定した。

西明寺には、在唐三十年にして空海と入れ替わりに大使葛野麻呂とともに帰国する大安寺の永忠がいた。早速空海は帰国の準備を調え大使らと合流する直前の永忠をたずねた。もう六十才を越えているような老和尚であった。永忠はわが子のような空海の手をとり、慈しむように唐の仏教事情や長安の仏教寺院の実情やここでの留学生活や各国の留学僧の様子などについて話してくれた。空海はとくに、密教や梵字・悉曇の然るべき師について聞いたであろう。永忠は華厳の教理にすこぶる詳しかった。

永忠は最初に醴泉寺の般若三蔵の名を口にしたであろう。そして先ずは般若三蔵を訪ねることを勧めたに相違ない。般若はインドの学僧で『四十華厳』（『華厳経』最終章の「入法界品」）を漢訳した人であり、当然梵字・悉曇には明るく、おそらく華厳宗当代の澄観と親しいので華厳と密教の親和性についてもよく知っているのではないか、澄観の『大方広仏華厳経疏』には華厳教理と密教体系との融和が書いてある、などと言ったであろう。さらに『四十華厳』訳出の際には、般若三蔵の弟子でこの西明寺の円照という和尚も手伝ったから、円照に般若を紹介してもらうといいとも言ったと思う。その

後、長安を発つまでの間、永忠は空海を円照に紹介したであろう。

一月もあっという間に過ぎ、大使らは任務を終え二月十一日帰国の途についた。長安に残る空海は、大使らと永忠を東の灞橋まで見送った。中国の故事に従い、ここで河べりの柳の小枝を折りそれを大使らに手渡し別れを惜しんだ。長安から西に行く時は渭水のほとりで同じように別れを惜しむのである。その日空海は担当官吏の案内で寄宿先の西明寺に移った。空海が案内された居室は何と永忠が三十年前に西明寺にきた時から使っていた部屋であった。

空海は、水をえた魚のように毎日西明寺を出て諸寺を訪ねた。ある日空海は、右街「西市」の一筋北、醴泉坊の醴泉寺をたずねた。ここに長安滞在中最も厚恩を蒙った般若三蔵がいた。この時は、永忠に勧められた通り西明寺の円照に同行を頼み、同じ遣唐使船で渡唐した霊仙もいっしょであったかと思われる。霊仙は後に般若三蔵のもとで『大乗本生心地観経』の筆受をつとめる。

般若三蔵（七三四～八一〇）は、北インド罽賓（カシミール）の出で二十三才の時ナーランダー寺に学び、インド各地を歴遊したのち南インドで達摩耶舎（ダルマヤシャ）から密教を受法し、七八一年海路入唐し翌年長安に入った。七八六年には、ネストリウス派キリスト教の大秦寺にいたペルシャ僧の景浄（アダム）とともに、胡本（イラン系ソグド語などの原典）の『六波羅蜜経』を漢訳したが、その時ははたせず後年梵本から漢訳した。それが『大乗理趣六波羅蜜経』である。般若は崇福寺や慈恩寺で華厳経典や密教経典など多くの仏典の漢訳に尽力し、『四十華厳』四十巻、『六波羅蜜経』十巻、『守護国界主陀羅尼経』十巻、『大乗本生心地観経』八巻などを残した。

空海は幸い般若に謁することができ、問いに答えて入唐留学の目的を吐露したにちがいない。室戸の窟で成就した虚空蔵求聞持法の奇瑞を話し、二十四の時に書いた『三教指帰』も見せたかもしれない。空海の唐語は長安ではわりとよく通じた。般若は空海の唐語のうまさや仏教理解の深さに驚きながら、『六十華厳』『八十華厳』や華厳教学について、『大日経』住心品について、梵字・悉曇・陀羅尼について、空海がどの程度理解をしているのかおそらく質したであろう。空海は、その都度明快に答えた。般若は突然目の前に現れた日本の若き僧をまじまじとみつめつつ、即座に空海の異能を見抜いた。

それ以来、空海の醴泉寺通いは毎日のようにつづいた。般若が留守の日は牟尼室利三蔵が相手をしてくれた。醴泉寺通院の主目的は、当面梵字・悉曇すなわちサンスクリットのスキルアップだった。基礎はほぼできていた。しかしまちがいがいくつもあった。二人のインド人三蔵の生のサンスクリットは空海の言語の異能を強く刺激した。

空海はほぼ毎日この語学練磨に集中した。日本ではわかりえなかった音韻や修辞や訳語を知り、真言・陀羅尼のインド的言霊を知った。真言・陀羅尼には霊力（シャクティ）が内在していて、この異次元のコトバは（大日）如来が発するものであることも知った。空海は、般若や牟尼室利の口から発せられる本場のサンスクリットに接しながら、大学寮を出奔して以来求めつづけていたインド世界の正体をはじめて実感した。二月からはじまったサンスクリットの濃密な習得は五月になるとサンスクリット音を聞いて漢訳語と唐語と和訳語がほぼ同時に頭に浮かぶほどになった。単語の一つ二つわからないものがあっても全体として意味を直感できるようになっていた。サンスクリット独特のコンパウンド（六離合釈）のほか語法や修辞にも通じた。

般若は『四十華厳』の漢訳をしていた。『四十華厳』は『六十華厳』や『八十華厳』の最終章である「入法界品」（善財童子という仏教に帰依をした童子が、五十三人の善知識を訪ねて教えを乞い、その教示に従って菩薩行を重ねる旅のはてに、最後の普賢菩薩のところで真如法界に相入できる物語、独立した経典の形態）に当る。

空海が西明寺で親交をもっていた円照の『貞元釈教目録』には、般若三蔵が訳出した『四十華厳』の梵本はインド烏荼国（オリッサ）の清浄師子王が書写し唐の高宗に献上したものだとある。

空海が『華厳経』や華厳教学に詳しいことを知って、般若は『四十華厳』のオリジナル・テキストを見せてくれたのではないか。そして唐ではすでに法蔵の「十重唯識」から澄観の「四種法界」の時代に移っていて、般若は『四十華厳』の訳出にあたってその澄観の助力をえたことなどを教えてくれたであろう。

空海は東大寺で法蔵の『華厳経探玄記』『華厳五教章』を学び、その「十重唯識」を頭にたたき込んでいたのだが、澄観の「四種法界」を聞くのははじめてであった。空海はそこで「一切皆空」の理とその理の顕現である事物・事象が一体的に矛盾なくある世界（「事理無碍法界」）から、「一切皆空」の理が脱落し事物・事象のみが重々無尽に妨げなく相互相入している世界（「事事無碍法界」）に至る教説を聞いた。

般若はつづけて、澄観は『大日経』の言う「五字」や『金剛頂経』の言う「三十七尊の出生」を依用して華厳教理を解釈していること、すなわち澄観には禅ばかりでなく密教への深い理解と傾斜が見られることを言ったかと思われる。そして手元にあった『華厳経疏』や『演義抄』を空海に見せ、参考にするように勧めたのではないか。空海はこの『華厳経疏』を持ち帰っている。「十住心」体系の構想に大いに役に立った形跡がある。さらに空海は、空海は『華厳入法界四十二字観門』『華厳経入法界品頓証毘盧遮那字輪瑜伽儀軌』『梵字文殊五字真言儀軌』『文殊問字母品』『華厳経心陀羅尼』など、華厳と密教の融合補完を意味する経軌を持ち帰っている。空海はこれらの文献を精査しながら後の空海密教の主要部分を構想したであろうことは想像がつく。

空海は華厳の修学と同時に、『大日経』具縁品以降の各章についても教えを乞うたであろう。般若は苦笑いし、この密経は読解するよりも然るべき阿闍梨からその三摩地法の伝授を受け、自らその曼荼羅海会の仏尊と瑜伽しなければ（一体となる観法ができなければ）会得できたことにはならず、それが密教というもので、今の長安では青龍寺の恵果和尚が最高の依止師であり、私はその任にない、と言ったに相違ない。

さらに般若は言葉を次いで、恵果の密教とは「金胎不二」といい、善無畏と一行が骨折った『大日経』だけでなく、金剛智三蔵と不空三蔵が尽力した『金剛頂経』とともに不二一体とする総合的密教で、両部の大法を恵果一人から伝授してもらえるいい時期であるが、恵果の健康状態からして残された時間に余裕がないことをつけ加えた。この時代の唐の密教は不空三蔵の愛弟子である恵果和尚を最高の依止師としていた。恵果が東塔院に住する青龍寺には、内外から千人を超える弟子が密法の受学に来ていたという。

恵果（七四六～八〇五）は、幼少時に出家し、当初から青龍寺に入り聖仏院の曇貞を師とした。その後不空三蔵に師事して、二十才で具足戒を受け『金剛頂経』系の密法を受法した。二年後、善無畏門下の玄超から『大日経』系の法を授った。三十才の七五五年、青龍寺東塔院に灌頂道場を下賜され、宮中内道場の護持僧に任じられた。七八九年には、日照りに際し請雨法を修し徳宗の帰依を受けた。八〇二年病をえて愛弟子義明に後事を託し、八〇四年般若三蔵の醴泉寺に金剛界曼荼羅を造り、般若のほか諸大徳が法筵に随喜した。その時請雨を修しその功顕があったという。

空海は、延暦二十四年（八〇五）六月十二日、西明寺で親しくなった志明・談勝らとともに、青龍寺東塔院に恵果和尚をたずねた。この時期までに空海の梵語力は相当のレベルに達し、『華厳経』と華厳思想の本場の解釈も身につけ、『大日経』も具縁品以降も学解ではほぼ掌中に収め、命がけの渡唐の目的はほぼ達成していたと言っていい。ただ、般若の言う両部の大経は会得するもの、密教とはそういうもの、という真意がよくわからないでいたので、そのこともあって恵果に会い『大日経』の実践部門の受法が叶うかどうかだけでも聞いてみたかったのである。

幸い、その日空海は恵果に会えた。見るからに病弱の気配がありありの老師であったが空海を見るや否やいきなり「君が長安に来ていることは知っていた。いつ来るかとずいぶん待ったものだ」と喜んだ。おそらく、情報源は般若三蔵であったろう。般若が空海の異能を一番早くまた最も濃密に見抜いていた。それをすぐ恵果に伝え恵果の正嫡候補として推薦していたと思われる。般若は恵果の最期が近いことを察していた。さらに恵果に千を超える弟子がいても、そのうち両部の大法を授けた高弟が何人かいても、まだ正嫡に価する機根の弟子には恵まれていないことが恵果の懊悩であることもよく承知していた。

恵果は空海の尋常でない機根を般若から聞いて、ほぼ正嫡に価する法器であると心に期してはいた。般若によれば、空海のとくにサンスクリットの語学力が抜群であるという。例えば、金胎両部の念誦法にしろ、諸尊供養法にしろ、行法のなかの真言はそれを聴いた瞬間にほぼ、サンスクリットそのものの意味が、あるいは唐語や和語への訳語変換が、わかるというほどにである。そのレベルにしてはじめて密法は正しく伝わるのである。それこそが、伝法の本来的な実体である。般若が空海を恵果の待ちわびる正嫡候補として推薦をする主因はそこにあったにちがいない。

空海に直接接した恵果は、般若の推薦が誤りでないことをすぐ悟った。即座に灌頂を授けようと言い出した。空海はその意味を計りかねた。空海にはそこまで密教というものがわかっていなかった。空海にわかる密教とは山岳修行レベルの雑密と『大日経』の学解だけであった。空海は恵果の真意を恐る恐る聞いたであろう。恵果は苦笑しながら、恵果を今最高の依止師とする「金胎不二」の密教の奥義を諄々と説いた。ここではじめて空海は仏教思想の最新バージョンを知った。教理的には華厳の理解が役に立った。奈良で学んだ三論（中観）や法相（唯識）も大いに役立った。しかし恵果の密教はそれら大乗を超えていた。

恵果の話を聞き、釈尊の仏教から密教までの全仏教史が「無執著」「無我」「空」「縁起」「法性」「仏性」「本覚」「諸法実相」「法界」「真如」「法身」「生仏一如」「菩提心」「速疾成仏」という、一連の教理概念の連鎖として空海の腑に落ちた。だか

らその瞬間、ここで恵果の勧めに従い金胎両部の大法を受法することがとりもなおさず仏道をえらんだ自分を全仏教思想史のなかに投帰することであり、この望外のチャンスを逃す手はないと悟った。

空海は慇懃に、「密教の修行未履修の私が灌頂の壇に入っていいのか」と聞いたであろう。恵果は笑って「君の機根はすでにそれを越えている、明日灌頂をやろう」と言った。同席した志明も談勝たちも大いに喜んだ。一番喜んだのはむしろ恵果だった。空海はすぐ般若にこのことを伝えた。般若は懇切に灌頂受者の心得から準備するもの、さらにこれから必要な修学について細かな助言をしてくれた。

翌六月十三日、空海は胎蔵界の「受明灌頂」（「学法灌頂」）を受け、七月上旬に金剛界の「受明灌頂」を受けた。「受明灌頂」とは、密教を受持しこれを学ばんとする者に弟子の資格を与えるいわば略式の灌頂である。とはいえ、灌頂の秘儀で一番に重要な「投華得仏」とその結果結縁した曼荼羅中一尊の秘印（最極秘の印）・秘明（最極秘の真言）の授受は行う。「投華得仏」とは、道場に引入され覆面（目かくし）をされた受法者が、手に「普賢三昧耶」の印を結び、口にその真言（「オン　サンマヤ　サトヴァン」）を唱えつつ、教授の僧に伴われて曼荼羅壇（灌頂壇）に進み、両手中指の間の先端に「華（五房が一本の茎についた樒の葉）」をはさみ、大壇の上に敷かれた「敷曼荼羅」の上に投げ落し（「投華」）、「華」が落ちた曼荼羅の一尊と仏縁を結ぶ（「得仏」）儀礼をいう。空海は、六月の胎蔵界につづき七月の金剛界の時も「華」が曼荼羅中央の本尊大日如来に落ち恵果を驚嘆させた。恵果は空海の言語の異能のほかに奇瑞を起す霊威的気質にも目を見張りながら、胎蔵界大日と金剛界大日それぞれの秘印と秘明を授けたに相違ない。

六月の胎蔵界「受明灌頂」のあと、空海は胎蔵界の梵字と儀軌の伝授を受けたという。つまり今でいう「胎蔵界念誦次第」であろう。これによって胎蔵界の三摩地法（念誦法）の練磨に入ったのである。空海はそれを一ヶ月ほど行った。そして七月の金剛界「受明灌頂」のあと、同じように「金剛界念誦次第」の伝授を受け、それによって金剛界三摩地法の練磨を重ねた。それもまた一ヶ月ほどである。

恵果は胎蔵・金剛両界の三摩地法の熟達ぶりを見届け、間を置かず八月十日、空海のために阿闍梨位を授ける「伝法灌頂」を行った。

先ず、空海は三昧耶戒の道場に引入され、壁代（布の囲い）のなかの高座に坐す恵果の御前に進み、仏性戒（「四重（禁）戒」「十無尽戒」そして（「仏性）三昧耶戒」）を受けた。
次いで、胎蔵界の灌頂道場に引入され、覆面（目かくし）をされ、「普賢三昧耶」の印を結び、その真言「オン　サンマヤサトヴァン」を唱え、曼荼羅壇の前まで進み、そこで「投華得仏」した。さらに恵果の待つ「小壇所」に移り、恵果から「五瓶」の水を頭上に注がれた。これが文字通りの「灌頂（頂に灌ぐ）」である。そして灌頂の秘儀中の秘儀である秘印と秘明の口授に移った。空海は五智の宝冠を頭にかぶせられ、胎蔵界大日如来の秘印と秘明を授かった。
同じ日つづけて金剛界の灌頂が行われ、空海は胎蔵界と同様の流れで金剛界大日如来の秘印と秘明を授った。灌頂の秘儀中、受者の空海は恵果に随って滞りなく秘印を結び真言を唱え、いくつもの作法所作を違えることはなかった。六月上旬から八月上旬までの両部念誦法練磨の賜物であった。

青龍寺の恵果和尚との奇跡的な出会いと金胎不二の密教受法により、空海は一介の私費留学生から一躍密教阿闍梨の師位をえて、真言付法の第八祖「遍照金剛」となった。空海がこれまで積み重ねてきた修学のすべてが一気にそして速疾に結実したのである。空海にサンスクリットを教え、かつ恵果和尚との間を取り持った般若三蔵は、空海の晴れの姿を称え、何度も「めでたし、めでたし」と言ったであろう。しかし、恵果和尚のもとで何年も修行を積みながら未だ灌頂に浴しない者や、「受明灌頂」の段階で止まっている者や、「伝法灌頂」も金・胎いずれか片方しか受法していない者が大半であったから、つい先日恵果和尚のもとに来たばかりの日本人の空海が多くの弟子たちを尻目に浴したこの大抜擢には、山内に不平不満も出たに相違なく、早速密教僧として高い地位にあった玉堂寺の珍賀から弟子たちの不満を代表してクレームがついた。恵果和尚はかまわず、供奉丹青博士の李眞や供奉鋳博士の楊忠信を呼び、曼荼羅や密法具の製作を命じ、師の不空三蔵から授かったものや自分の付嘱物を空海に与えた。そして「この密法をすぐに日本に持ち帰りそれを弘めなさい、それが私への報恩になる」と諭した。
この恵果和尚のお諭しが、在唐二十年の留学義務を破ってまで早期に帰国する理由であろうことは確かであると思われるが、恵果和尚が空海に早期の帰国を勧めた背景に、珍賀のクレームが意味するように、弟子たちのなかには恵果和尚への不満や日本人僧空海への特別扱いに対する不平があり、それが昂じて危害を加えられたり命をねらわれたりすることへのリスク回避があったかも知れない。

と言うのも、空海の大安寺におけるサンスクリット習学の僚友で空海とともに第十六次遣唐使船で唐に渡り、長安の般若三蔵のもとで訳語・筆受をつとめた霊仙は、憲宗皇帝の寵愛を受け、天長二年（八二五）には淳和天皇から黄金が贈られるなど栄誉に浴したが、憲宗暗殺に伴う迫害を恐れて逃げた五台山で、その修行僧たちの嫉妬によって毒殺されたことを、八四〇年に五台山に入った円仁が僧たちから聞いていることがあり、思えば空海の身に危険が及ぶ可能性がないわけではなかったと思われる。このほか、空海の約四十年後に入唐した円仁が具に遭遇した中国仏教にとっての法難、武宗による「会昌の廃仏」（八四五～八四六）の予兆を察して、恵果和尚が空海に早期の受法と帰国を勧めたという説がある。

夏に伝法灌頂を受法した空海は、その後の日々が一変した。西明寺の居室を早朝に出て一日中青龍寺の恵果和尚のもとで各種念誦法の伝授を受けたり密教経典を受講解読する日が続いたと思われる。この時期に空海が入唐後おそらく最も注目していたと思われる『大日経疏』の伝授があったのではないか。『大日経疏』は七二五年に善無畏三蔵が漢訳した『大日経』の註釈であり、善無畏が講じ弟子の一行がそれを筆受し註釈を加えた『大日経』理解のための必読のテキストである。しかも、のちの空海が独自の密教を構想するのに大変大きな論拠となった。真言宗の伝統では古来、能化（総本山の住持）が根機のある所化（伝法灌頂ほかの大法を履修した阿闍梨位にある者）に伝授する習い（講伝）となっている。

空海は、この『大日経疏』をはじめ新訳の密典・儀軌・梵字真言讃を書写生に頼んで書写しはじめ、橘逸勢らの手も借りて『四十華厳』ほか修学の記録を書き留めることもはじめたであろう（「三十帖策子」）。詩文や書の書籍も集め、注文した絵図や法具のほか筆や墨に至るまで作らせ、日本に持ち帰る準備をはじめた。橘逸勢は「君は、国禁を犯してまですぐにでも帰るつもりなのか」といぶかったであろう。

幸いに、折りしも同じ第十六次遣唐使船団の僚船で東シナ海で遭難し那ノ津に引き返していた判官高階真人遠成の率いる第四船が単独で渡唐し、朝貢のため長安に入っていることを聞いた。そして鴻臚館に滞在中の判官に直接面会し、自分が奇跡的に受法したえ難き仏法を早く日本に持ち帰り国家のために役立てたいため、国禁を破ってでも判官とともに帰国したい旨を申し出（「本国ノ使ニ与ヘテ共ニ帰ルコトヲ請フ書」、『性霊集』）、いかに国家のために有益かを必死に説いたであろう。真人はこの国禁破りの尋常でない申し出に官吏として苦慮しながらも、事の重大さを理解し、早速空海の帰国を唐朝に奏上し、ほどなくその許可が下りたのである。

貞元二十年（八〇四）、使を遣して来朝す。留学生橘免勢、学問僧空海。
元和元年（八〇六）、日本の国使判官高階真人上言す。
前件の学生、芸業稍や成りて、本国に帰らんことを願ふ。
便ち臣と同じく帰らんことを請ふ。之に従ふ。（『旧唐書』）

そうこうする間に、年末の十二月十五日、師恵果和尚が自坊の東塔院で示寂した。空海はまさに、恵果和尚の恵命が尽きるぎりぎりの時間に間に合って師法をほぼすべて授受したのであった。恵果和尚の遺骸は、翌年（大同元年（八〇七））の正月十六日に埋葬された。空海は弟子を代表する形で師の碑文を撰した（「大唐神都青龍寺故三朝國師灌頂阿闍梨耶惠果和上之碑」）。

空海は師の埋葬を見届けると帰国を急いだ。手配していた曼荼羅ほかの品々も皆できあがってきた。空海が長安を辞した日はわからないが、その年の四月にはもう浙江省にいたことが判明していることから、二月中旬から下旬には長安を発っていたと思われる。盛大な送別の宴が催されたという。醴泉寺の般若三蔵や牟尼室利三蔵そして霊仙、青龍寺の義明ら、西明寺の円照や志明や談勝をはじめ、長安の文芸界の著名人たち、書の師韓方明も出席したであろう。皆が空海の早い帰国を惜しんだ。

旅立ちの朝、長安城外の灞橋のたもとには朱千乗・朱少端・曇清・鄭申甫ら文人たちが集り、空海との別れを惜しんだ。別れの最後に般若三蔵が柳の枝を空海の手に渡し、空海を抱擁しながら、「できることなら君といっしょに日本に渡りたいものだ」と言ったかと思う。七十をすでに越えた般若三蔵は老令を悔やみながら、日本に渡りたい願望をいつも空海に明かしていたのである。

「江南の春」も真っさかりの四月二十日、空海一行は越州（紹興）に着いた。この町の水は東シナ海に注いでいる。空海はこの浙江の地に四ヵ月留まるのだが、これは空海の事情ではなく判官高階真人ら遣唐使節の都合であったろう。船の準備などの事情もあったであろう。

この間を利用して空海はいくつものことをこなした。
先ず越州の地方長官（節度使）に「越州ノ節度使ニ与ヘテ内外ノ経書ヲ求ムルノ書」を呈し、仏教の経・律・論・疏・章・伝記、唐の詩・賦・碑・卜占・医学の典籍、さらに五明（声明（音韻・音学・語法）・工巧明（工芸・技術）・医方明（医術・薬学）・因明（論理学）・内明（仏教の宗学））のうち、済世利民に役立つ書籍を日本に伝えたいので、その入手に便宜をはかってくれるよう要請をした。空海は自らもこれらの典籍の収集にかなりの時間を費やしたにちがいない。
次いで空海は、鏡湖東方の峰山道場に龍興寺の順暁をたずねたはずである。善無畏三蔵の弟子の義林や一行から『大日経』系の密教を受法し、不空から『金剛頂経』系の密法を受け、師恵果和尚とは同輩だったという順暁老師が越州にいて健在であることを、空海は青龍寺で聞いていた。
その順暁をたずねた。順暁は最初、突然たずねてきた日本人僧の空海が、よもや真言付法の第八祖阿闍梨だとは理解できなかっただろう。おそらく日本からきた若い渡来僧が密教の伝授を乞いに来たものと思ったにちがいない。前年に最澄という例があったからである。やっと空海の身分を理解した順暁は師弟関係のような態度で話を続け、去年の四月の中頃、日本の最澄という請益僧が天台山からの帰途来訪し、しばらくここに留まって「五部灌頂」を順暁から受け、『大日経』『金剛頂経』『蘇悉地経』の「三部」の三摩地法（念誦法）を授かって帰ったと言った。

「五部灌頂」とは、伝法の阿闍梨が受者に対し「五仏」（大日・阿閦・宝生・無量寿・不空成就）を表す「五瓶」（五つの花瓶、法具）の香水を「散杖」（長さ四十㎝程度の細い梅の枝）の先につけて受者の頭上に注ぎ、「五智」（「五仏」の智慧）の宝冠を頭上に載せ、秘印と秘明を授ける、という灌頂秘儀の一部である。もともとは金剛界法のものであるが「伝法灌頂」の時は金胎両部ともに行われる。
順暁が密教修行未履修の天台僧最澄に「伝法灌頂」を行うはずはなく、おそらく「受明灌頂」（学法灌頂）であっただろう。空海も恵果和尚からはじめて「受明灌頂」を受けた時に「五部灌頂に沐し」と言っている。順暁は、自ら授けた灌頂がいかなる段階のものか最澄に言わなかったに相違ない。その証拠に最澄は後年、「受明灌頂」を高雄山寺で空海から受法するが、それが「伝法灌頂」ではないことを知って大いに落胆し、「いつ、正式な灌頂（「伝法灌頂」）が受法できるか」と空海に聞いている。しかし最澄の密教受法を聞いた空海は心おだやかではなかった。最澄が桓武の厚遇を受けていることは、第十六次遣唐大使の藤原葛野麻呂から聞いていた。最澄が密教を持ち帰ったことを桓武が大いによろこび、朝廷にもう密

法が広まっている様を想像して、空海は眠れぬ夜を幾晩も過したであろう。

あっという間に春が過ぎて夏になり、八月も半ばを過ぎた。空海は長く留まった越州を辞し、ここでさらに増えた請来品を船に積み込み明州（寧波）に向った。そして明州に着くとすぐ阿育王寺に表敬参拝した。阿育王寺は西晋時代（二八二年）の創建になる明州郊外の古刹であった。この寺に七四四年、鑑真和上らが二度目の渡海に失敗し滞留したことがある。鑑真一行は、官憲によりこの律宗の古刹で軟禁状態になったが、住持ほか山内の僧たちはこの高徳の律僧一行を手荒に扱うはずはなく、やがてここを密かに脱してふたたび渡海するのを助けたと思われる。ここから遠く天台山を遠望することができる。善無畏の『大日経』講義を記録して師とともに『大日経疏』著わした一行は、晩年ここに順錫し、そこで示寂した。空海は急ぎ足で禅院天童寺にも参詣したであろう。ここには後年、宋の時代に栄西と道元がきて修行し、禅画の雪舟は二年間留錫しこの寺の首座にまでなった。

唐土を辞去する日がきた。「虚しく往いて実ちて帰る」のである。空海は紅衛塘の熱砂の浜辺で海上安全を修法し、持していた三鈷杵を海中に投げ入れた。伝説ではその三鈷杵が海を越えて高野山の壇上伽藍に落ちたことになっている。

大同元年（八〇六）十月、空海は無事に那ノ津に帰った。

帰国後、大使高階真人遠成たち使節団は那ノ津の大宰府鴻臚館に入りしばし休憩をとっていたが、やがて京に向けて出発をする。しかし空海は一人太宰府に残らなければならない。唐にあって二十年間勉学にいそしむという留学生の定めを破りたった二年足らずで勝手に帰国したことは、空海の長安での偉業がいかに大きなものであったにせよ国禁を犯したことには変わりがなかった。空海はその違背行為について朝廷の許しを乞わなければならなかった。

十月二十二日、空海は朝廷に許しを乞う表をしたため、長安から請來した新訳の経軌及び曼荼羅・法具・絵像・恵果和尚からの付嘱物などの目録（「請来目録」）とともに京に帰る高階判官に託した。

朝廷に差し出された「請来目録」はほどなく、空海が言うほどに得難きものかどうかを吟味するため、先に密教をもたらし高雄山寺で国家灌頂を行った内供奉禅師の最澄によって点検されることになったであろう。最澄がそれを一覧してただならぬショックに見舞われたであろうことは想像に難くない。

最澄は請益僧（短期国費留学僧）として空海と同じ第十六次遣唐使船で唐に渡り、天台山で智顗の天台教学を学び在唐一年足らずで帰国した。天台山の帰途、越州の峰山道場で順暁に従って不完全ながら灌頂等の密教を受法し、その時得た密典等を「将来目録」として朝廷に上奏した。桓武天皇は大いに喜び、早速最澄に勅し高雄山寺において国家灌頂を行わせ、自らも受法していた。この灌頂は密教に結縁する「受明灌頂」であった。これは本来天台法華一乗と大乗菩薩戒の戒壇をもって新しい国家仏教たらんとしていた最澄にとって本旨・本筋ではなかった。最澄にとって密教は、天台宗が国家仏教たるべき一部分に過ぎないはずであったが、あまりの桓武の喜びようにそれは言えないジレンマであった。そこに私費留学生の身であった空海が長安で短期間に偉業をなしとげ、正統密教の第八祖阿闍梨の師位を得、しかも自分の知らない密典をたくさん携えて帰国したのである。最澄は空海の「御請来目録」を見て即座に自分の密教の欠を察し、高雄山寺で行った国家灌頂が非法であったかどうか気をもまずにいられなかったであろう。

大宰府鴻臚館にいる空海のもとには時折、京や奈良からの情報が官人によってもたらされていたであろう。空海は高階判官に託した「御請来目録」が都でどんな反響を呼んでいるか早く知りたかった。国家灌頂をやったという最澄の密教レベルにも強い関心をもっていたに相違ない。この鴻臚館にいる間、空海は持ち帰った経軌類の整理に精を出す一方、密法の流布につながる世事にも早速意を用いた。年が替って大同二年（八〇七）二月、日頃何かと世話になっている大宰府副官田中少弐の母の一周忌法要のために願文を撰し、千手観音をはじめとする「十三尊曼荼羅」を画き、『般若心経』や『法華経』を写経して供養の品に加え、少弐自身には自ら造った梵漢対照の『千手（観音）儀軌』を贈った。

「御請来目録」の提出から半年後の同年四月二十九日、大宰府政庁は大同四年（八〇九）のはじめまで隣りの観世音寺に留まるよう空海に命じた。国禁破りのペナルティーであった。空海はこの命令に従い、大量の請来品とともに観世音寺の「客僧房」に移り、そこに腰を落ち着けた。観世音寺には、養老元年（七一七）に入唐し、在唐十八年にして玄宗皇帝にその才を認められ、帰国の際は『大日経』などの密教経典を含む五〇〇〇巻余の仏典を請来した玄昉が眠っていた。玄昉が請来した『大日経』（天平写本）を空海は奈良の久米寺の東塔のもとに感得し、それを西大寺で実際に見たのであった。ここでの足止めは、空海の伝法にとっては長過ぎるのだが、独自の密教を創案するには程よい時間であった。

■流通及び讃頌

【原文】

夫釋教浩汗無際無涯。一言弊之唯在二利期常樂之果自利也。濟苦空之因利他也。空願常樂不得也。徒計拔苦亦難也。必當福智兼修定慧竝行。乃能濟他苦取自樂。修定多途有遲有速。翫一心利刀顯教也。揮三密金剛密藏也。遊心顯教三僧祇眇焉。持身密藏十六生甚促。頓中之頓密藏當之也。是故無畏三藏捨王位而忘味。代宗皇帝屈北極而不厭。龍智和尚八百不老。崇惠禪師摧邪支傾。法之不思議豈過斯藏乎。慕覺之徒願聞未聞。頌曰

法無行藏　隨人去來　似寶難得　得則心開
投身半偈　豈論珍財　孜孜書寫　其來悠哉
願此介福　國泰人蕃　一聞一見　竝悉脱煩

大同元年十月二十二日。入唐學法沙門空海

【書き下し】

夫れ釋教は浩汗（こうかん）にして際（きわ）無く涯（かぎり）無し。一言にして之を弊（おお）えば唯だ二利に在り。常樂の果を期するは自利なり。苦空の因を濟うは利他なり。空しく常樂を願うも得ざるなり。徒らに拔苦を計れども亦た難なり。必ず當に福智兼ね修し定慧竝べて行じ、乃（いま）し能く他の苦を濟い自の樂を取るべし。定を修するに途多く遲有り速有り。一心の利刀を翫（もてあそ）ぶは顯教なり。三密の金剛を揮（ふる）うは密藏なり。心を顯教に遊ばしむれば三僧祇眇（はるか）なり。身を密藏に持すれば十六生甚だ促（すみやか）なり。頓中の頓、密藏之に當るなり。是の故に無畏三藏は王位を捨てて味を忘れ、代宗皇帝は北極を屈して厭わず。龍智和尚は八百にして老いず、崇惠禪師は邪を摧き傾くを支えたり。法の不思議は豈に斯の藏に過ぎんや。慕覺の徒、願わくは未だ聞かざるを聞け。頌に曰く、

法は行藏無し。人に隨って去來す。寶の得難きに似たり。得れば則ち心開く。
身を半偈に投ぐ。豈に珍財を論ぜんや。孜孜として書寫す。其の來ること悠かなるかな。

願くは此の介福(かいふく)をもって、國泰く人蕃(ふ)えんことを。一たび聞き一たび見て　竝びに悉く煩わしきを脱(まぬが)れん。

大同元年十月二十二日。入唐學法沙門空海

【私訳】

およそ仏教の教えは広大で際限なくまた果てしないものです。一言で蔽って言えば自利・利他の二利にあります。涅槃の常住不変と苦を離れた安楽の仏果を期するのが自利であり、一切皆苦や一切皆空の原因を抜濟するのが利他であります。うつろに常楽を願っても得られず、やたらに抜苦を計ってもまた難しいものです。かならず、福徳と智徳を兼修し、定（禅波羅蜜、禅定、瞑想）と智慧の行（般若波羅蜜、諸法の洞察）を同時に行じ、他者の苦を抜濟して自らの安楽とするべきであります。定を行じるには多くの方法があり、瞑想に速い遅いがあります。三界唯心という鋭い刀（武器）をもてあそぶのは顕教であり、身・口・意の三密（相応）の堅固さを揮うのが密教であります。心を顕教に遊ばせれば三阿僧祇劫の成仏ははるか遠く、密教に身を持すれば、十六大菩薩の出生ははなはだ速やかなのであります。頓悟中の頓悟で、密教はこれに相当します。ですので、善無畏三蔵は王位を捨てて食事の味も忘れ、代宗皇帝は天子の座を屈することを厭わず、龍智和尚は八〇〇才になっても老いず、崇惠禪師は邪魔外道を砕き、傾いている仏法を支えました。仏法の不思議なことは、この密教に過ぎることはありません。サトリを慕い求める人たちは、まだ誰も聞いたことのない密教の教えを聞いていただきたく願っております。

頌によって申し上げます。

仏法には行くも留まるもなし。人の根機に随って去來す。宝の得難いことに似ている。仏法を得れば心が広がる。

偈文の半分に身を投ず。どうして珍しい財宝である密法を論じないであろうや。一生懸命に仏典を書写した。

仏典のこの国に來ることは何と悠かなことか。願わくは、この（仏典を本国に請来する）仲介の福徳によって、

国は泰らかになり密法の人が増えんことを。密法を一度聞き一度見れば、みんなすべからく煩悩をまぬがれるのである。

大同元年十月二十二日。入唐學法沙門空海 。

【註記】

①浩汗：広大。
②弊：『弘法大師全集』では「蔽」う。
③二利：自利・利他。
④常樂：涅槃が常住不変であることと苦から離れて安楽なこと。
⑤一心：三界唯心。華厳や唯識。
⑥利刀：鋭利な刀。転じて
⑦眇焉：はるか遠いこと。
⑧無畏三藏：善無畏三藏。
⑨北極：北極星。天子の座。
⑩崇惠禪師：不空三蔵の弟子とされる牛頭禅の禅僧、悟空が住したという長安・章敬寺の沙門。
⑪慕覺：サトリを慕い求めること。
⑫介福：仏典を日本に請来する仲介の福徳。

■あとがき　敵か味方か、白か黒か、損か得か、「二項対立」思考の限界と「二而不二」の空海密教

宗祖弘法大師のご誕生一二五〇年に当る昨年―が私にとって傘寿の年になることから、一つには宗祖大師への報恩謝徳、一つには自分の傘寿記念として、宗祖大師の遺文・遺作の何かを草学道ノートにし、真言僧人生の締めくくりにしようと考え、選んだのが『性霊集』『御遺告』『御請来目録』『梵字悉曇字母幷釈義』『高野雑筆集』だった。どれもが宗祖の生の声を聴きたかったからである。しかし、生の声と言っても、学問的には『性霊集』の一部や『御遺告』に、後世の誰かの雑音が挿入・加上される偽作の問題があり、かならずしも全てが宗祖の生の声ではないのであるが、伝統教学（宗乗）では宗祖の真作とされてきた著名な五部を、私なりの問題意識をもって「読む」ことにした。そのうち、『性霊集』の一部と『御遺告』は昨年本と冊子にして私家版で公表した。

『御請来目録』を読みながら、『二教論』『十住心論』などとはまたちがった、宗祖大師の生の声に接することができた。「空海」という日本の思想、ことに宗教哲学・言語哲学を代表するたぐい稀な「知の巨人」の生の声にふれることができ、草学道人として感慨無量のものがある。つくづく世界レベルの「知の巨人」弘法大師の末徒でよかったと思う。

以下は、今回『御請来目録』を読んでみての感慨の一端である。

唐から二百十六部・四百六十一巻もの仏典類を船載して「実ちて帰った」宗祖大師が母国に弘めたのは、独自に創案・編集した「包摂」「総合」の空海密教だった。私の言い方では「包摂」「総合」「否定即肯定」の哲学。すなわち「二而不二（金胎不二・生仏一如など相対二律の同着」「十住心（九顕十密、全仏教思想史の総合）」「阿字本不生（一切諸法（多）が阿字（一）に帰入する一即多・多即一の包摂）」等々。ヘーゲルが「アウフヘーベン」を言うとうの昔に、鈴木大拙が得意げに「即非」を言い、西田幾多郎が「絶対矛盾的自己同一」に酔う一〇〇〇年も前に、二律相反の「空と実有」「仏と衆生」「サトリと虚妄」などを「包摂」し、二項相対の「金剛界と胎蔵界」「一と多」などを「同着」させ、同時に南都の旧仏教と平安京の新仏教を「包摂」し、釈尊から密教までの「三国伝灯」の全仏教史を「総合」したのである。

これをまた私の視座で言えば、南都の旧仏教と平安京の新仏教の「包摂」は、信奉する不空三蔵の国家密教を範とした密教ナショナリズムであり、平安京における国家鎮護の新しいパラダイムソフトである。その象徴として、東寺の講堂に、

新しい国家鎮護のマザー・大日如来を祀り、その分身の四仏・五大菩薩・五大明王・四天王・梵天・帝釈天を十方に配置し、この「立体曼荼羅」によって新しい国家鎮護の中心をヴィジュアル化して見せた。

「三国伝灯」の全仏教思想史の「総合」は、師恵果和尚を範とした密教インターナショナリズム（国際化密教）であり、インド（密教経典・真言・陀羅尼・儀軌、仏教化したヒンドゥーの神々・供儀）・中国（漢訳一切経・法相・華厳・天台・般若・善無異・一行・不空・『釈摩訶衍論』、儒家の思想・老荘思想・道教）・日本（倶舎・律・成実・三論・法相・華厳・天台）の「三国伝灯」のコンテンツを満載していた。

日本は明治維新を契機に急激な西欧化を進め、西欧列強に追いつけ追い越せとばかりに近代国家への道を突き進んだ。徳川三百年の間に定着していた武士道精神をはじめとする日本特有の国家パラダイムが一挙に崩壊し、西欧の近代主義にとって代わられた。西欧の啓蒙主義・民権主義・理性主義・論理主義・科学合理主義に浮かれた文明開化派の福沢諭吉や中江兆民は、真言密教を「淫祠邪教のたぐい」「迷信」だと切り捨て、鈴木大拙や西田幾多郎は「空海密教」を学びもせず「前近代」だとばかりに無視した。

一方また、明治政府は国家神道の徹底のために廃仏毀釈を断行し、神仏習合の象徴だった真言宗の神宮寺をはじめ全国各地の寺院を破壊し、僧侶に神官になるか還俗するかを迫った。お寺は幕府の公的機関だった立場から民間の自営業者の立場に放逐され、僧侶は官僧から民僧になり、お寺という自営業の経営者になった。明治期の住職は、近代化（西欧化）という時代のパラダイムシフトに加え、廃仏毀釈すなわち法難というパラダイムシフトにも対応しなければならなかった。

さらにまた、大東亜戦争に負けた戦後、アメリカを中心とする西欧モダニズムが急激に日本を折檻し、戦後日本は政治・経済から人々の生活スタイルに至るまで、とくにアメリカのモダニズムに無条件で無批判的に染まった。お寺の世界では、ＧＨＱの農地解放によって、長く所有してきた農地を召し上げられて自給自足の経済基盤を失い、他方で新憲法の信教の自由をいいことに、物質文明・拝金主義に心を奪われた日本人は急速に信仰心や宗教的志操を失くし、「家」の伝統宗教に無関心になった。ここでもまた、戦後の日本を支配する時代のパラダイムシフトと、寺院構造のパラダイムシフトに遭遇し、それへの対応に苦しむことになった。

戦後の混乱を経て経済社会が復興期に入ると、お寺の世界にも復興のきざしが見え、本堂・庫裡の再建・新築など山容整備が行われるとともに、宗派による宗団教化運動がはじまった。高野山真言宗の「生かせいのち」運動、真言宗豊山派の「光明まんだら」運動、天台宗の「一隅を照らす」運動、浄土宗の「おてつぎ」運動、真宗大谷派の「同朋会」運動、真宗本願寺派の「御同朋の社会をめざす」運動、臨済宗妙心寺派の「おかげさま」運動などである。その動因は、直接的には創価学会など個人を対象とした新興宗教の抬頭に抗するものだったが、本質的には戦後モダニズムから発する社会の矛盾や人々のストレス（個人と社会・個人と「家」・個人と組織、利己・自己主張・個性、他者との関係、核家族・親と子・嫁と姑、貧富格差・学歴格差・男女差別、左右対立、労使・労資（階級闘争）・大企業と零細企業、物質文明・拝金主義、科学的論理主義・科学的数値盲信・科学的合理主義、敵か味方か、損か得か、白か黒か、善か悪かの二者択一思考、都市と地方格差・過密・過疎、等々）に対峙するアンチモダニズム（敢えて言えばポストモダン）運動だった。

本宗でも、時の管長那須政隆大僧正猊下のご提撕のもと、宗派挙げての宗団教化運動「つくし合い運動」を準備した。東京別院真福寺の地下にあった智山教化研究所で「ミスターつくしあい」と言われた岡田昌道師（別所内局教化部長）をキャプテンに、斉藤昭俊・小峰一允・布施浄慧・小室裕充・小山榮雅・上村正剛・寺内照恒・真保龍敞・吉田宏哲・遠藤祐純・福田亮成・小山典勇・那須政玄（敬称略）といった教学・事相・教化・宗教学・西洋哲学・著述の錚々たる各師に親の七光りに過ぎない私が末席を汚し、総力を挙げて研究・議論・企画・立案したもので、宗祖大師の「包摂」「総合」をもとに、現代社会を曼荼羅に見立て、曼荼羅諸尊の「相互供養」に擬し、「相互供養」＝「つくしあい」、誤解を恐れずにわかりやすく言えば、「ワン フォー オール オール フォー ワン」を中心理念とした。

私にとって「つくしあい運動」は、戦後日本の自我の助長・利己主義・自己主張・独善排他・個性尊重といった風潮や個人を対象とする狂信カルトの新興宗教に対するアンチパラダイムソフトだった。私は、日本の伝統的文化や宗教や習俗・慣習や宗教的価値世界を保守するのが寺院住職の本務だと思っていて、その意味で檀信徒教化とは日本人が戦後染まったアメリカのマネごと民主主義（モダニズム）の矛盾やウソや偽善と闘うことだと思っていたので、自分が所属する宗派が社会教化を視座に据えたパラダイムソフトを準備することに熱い期待を寄せていた。私にとっては密教ナショナリズムの立場からのアンガージュマン（社会参加）だった。

しかし「つくしあい運動」は、教化研究所が用意したテキスト『つくしあい手帳』をもとに、全国のブロックや教区において宗務庁主催の説明会が行われ、いよいよ稼働というその直前に急ブレーキがかかり闇のなかに消えた。伝統宗派が自宗の教学をもとに戦後日本のアメリカンモダニズムに対峙する教化ソフトを発信する意味において、本宗は何もせずに、伝統宗派によるアンチモダニズム運動の戦線から姿を消したのである。ご提撕のあった那須猊下は何と思われたか知る由もないが、猊下の脳裡には空海密教こそ戦後日本のアメリカンモダニズムに対峙できるパラダイムソフトだという自信がおありになったと、私は勝手に思った。

今は昔、老いの繰り言になるが、私にとって、多様・多重・複合・神秘、超近代・超合理・超理性・超論理・超言語、超構造・超科学・超人間中心、伝統性・自然性・ネイティブ性、デュアリズム（「二而不二」）・対立の超克（「九顕十密」）、といったコンテンツを満載した「包摂」「総合」の空海密教は、日本の戦後モダニズムに対峙するパラダイムソフトだった。

今私たちは、ロシアとウクライナ、イスラエルとパレスチナの、終わらない殺し合いを目の当りにし、勝つか負けるか、敵か味方かの二者択一思考は怨念・報復の連鎖となり、安っぽい人間中心の近代ヒューマニズムは全く通用しないことを突きつけられている。民族間の怨念と血を血で洗う殺し合いは、モダニズムでは解決しないのである。歴史を重ねるとともに人間は進化・進歩するはずだったが、プーチンもネタニヤフも劣化してヒットラーに逆もどりし、国際社会には対立・分断を解決できる超モダンの救世主も現われない。人間中心・理性・人道は、二律背反の連立方程式が解けないのだ。

昔、インド仏教中観派は、釈尊（「十二縁起」）の「此あるが故に彼あり、此滅するが故に彼滅す」という「此」と「彼」の関係性を時間差ではなく同時的に解釈し、「此」と「彼」の関係は「（「短」と「長」のように）片方がなければ別な方もあり得ない」相互に依存する「相依相待」の関係にあって、片方それ自体で自ら実在するものではない（「相依性縁起」）として、背反二律の連立方程式を解いた。この論理で言えば、敵も味方も「相依相待」の関係にあって、片方がなければ片方もあり得ない、すなわち敵も見方もなく、この「中」の立場こそが「空」であり、敵も味方も「仮」の姿・形に過ぎないである（「空・仮・中の三諦」）。若き日、三論教学の殿堂大安寺所属の沙弥だった宗祖大師は、この「中」の論理をいやというほど頭に叩き込まれたに相違ない。

対立二項を二者択一でしか考えられない国際社会のなかで、中国によるチベット民族浄化・弾圧・迫害に対し、亡命・非暴力・非抵抗運動で闘っている仏教指導者ダライ・ラマ法王の「中」の現実的な実践と、手の汚れていない国際社会の立場が、ウクライナやパレスチナの仲裁に説得力を持つ。ロシア正教もウクライナ正教もユダヤ教もイスラム教過激派も宗教指導者が殺し合いを助長し、ローマ教皇も口先人道主義の現在、世界の仏教徒がこぞって国際社会に訴え、ダライ・ラマ法王を停戦・和解のための全権特使にお願いしたらどうか、世界仏教徒連盟はそれを全面サポートするのである。

しかし、そんな絵に画いたモチのキレイごとで、ウクライナには北朝鮮のロケット弾が撃ち込まれ、イラン製の武器が使われ、ハマスによるイスラエル奇襲テロの際には、国連（パレスチナ難民救済事業機関）の職員十二人が手引きをし、北朝鮮のロケット弾が飛び交い、ロシア・イラン・北朝鮮対ＮＡＴＯ・アメリカ・西側、パレスチナ・イスラム教過激派・イラン・北朝鮮対イスラエル・アメリカという対立構図の複雑にからみ合う連立方程式を解けるとも思えない。仏教の「中」のアウフヘーベンが、凄惨な殺し合いの仲裁に通用するかどうかもわからない。だとすれば、仏教は現実ばなれした思弁哲学に過ぎないのか、血を血で洗うような修羅道の苦は救えないのか、世界仏教徒連盟はただの仏教交流団体なのか、ということになる。今もし宗祖大師がこの世におられたら、きっと「否定即肯定」「ゼロ（空）」の論理で連立方程式を解き、国際社会に現実的な共存和平の仲裁策を考え、「包摂」「総合」の民族和解案を以って関係国を説得するだろう。

昨秋十一月、思うところあって根来に詣で、年来の友で仏画師の牧宥恵さんの案内で広い寺域を一巡してきた。その際、奥の院の興教大師御廟の手前右にある頼瑜僧正のお墓と、智山から出た座主猊下のうち川崎辨龍（六波羅蜜寺）・荒谷實乗（滝谷不動明王寺）・中島榮知（前山寺）の三猊下の合祀墓にも合掌し線香を手向けた。牧さんのお蔭で、五百仏山を背にした旧智積院の跡地や菩提院の跡地もわかり、最後に大伝法堂にお参りし、学山智山の源流を拝することができた。帰路、間もなく行われる冬報恩講出仕論議の論題に思いを馳せた。